



乙類遺跡 1 出土土器



繪面部分詳細



序

小都市では、これまで市域北部のニュータウン開発や中部の工業団地造成に先立ち、多数の埋蔵文化財の発掘調査を行ってきました。これによって国指定史跡「小郡官衙遺跡群」や福岡県指定史跡「花立山穴観音古墳」のような文化財が発見され、遺跡の宝庫として全国的に知られるようになりました。

近年、歴史的な価値を持つ人類の文化的所産を「文化遺産」という名称で広くとらえようとする考え方が一般的となっています。法や条例で指定・登録されたいわゆる「文化財」だけでなく、地域の歴史や文化が生み出した身近なものを評価しようという動きです。全国各地で市街地の都市化や住民の高齢化が進み、それぞれの土地に根付いた歴史と文化が失われつつありますが、これに歯止めをかけることが急務となっています。生まれ育った地域の「文化遺産」は、わたしたちの生活を豊かにするだけでなく、精神的な支柱ともなりえます。大切に守り、次の世代へ継承していかなければなりません。

今回ここに報告いたしますのは、平成26年度の国庫補助事業として発掘調査を実施した埋蔵文化財です。いずれも小規模な調査ですが、ふるさと小郡の歴史を明らかにするための貴重な資料をえられました。本書が、地域の歴史と文化を伝えるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の各調査において市内在住のみならずには多大なご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

平成28年3月31日

小都市教育委員会

教育長 清武 輝

例言

1. 本書は平成26年度国庫補助事業として、小郡市教育委員会が実施した乙隠遺跡、前沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載する遺構の実測は調査担当者が行い、製図は宮崎美穂子が行った。遺物の実測・製図は久住愛子が行った。
3. 本書に掲載する遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
4. 出土遺物の洗浄・復元には衛藤知嘉子・佐々木智子・藤岡恵子・永富加奈子・山川清日の協力を得た。
5. 本調査に関わる出土遺物・写真・カラスライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。
6. 本書は第3章の乙隠遺跡1次調査分を山崎が、その他を上田が執筆、編集を行った。

凡例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。
溝状遺構（溝）：SD 土坑：SK ビット：SP 不明遺構：SX
4. 挿図中に示している数字は本文中の各遺物番号と一致する。

本文目次

巻頭図版

序 例言 凡例

第1章 調査の経過と組織	1
【乙限遺跡1】	
【乙限遺跡2】	
【前沢遺跡】	
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の成果	4
（1）乙限遺跡1	4
【調査の概要】	
【遺構と遺物】	
【小結】	
（2）乙限遺跡2	9
【調査の概要】	
【遺構と遺物】	
【小結】	
（3）前沢遺跡	25
【調査の概要】	
【遺構と遺物】	
【小結】	
遺物観察表	32

抄録 奥付

挿図目次

第1図	調査地位位置図(S=1/5,000)	1
第2図	周辺道路分布図(S=1/50,000)	2
【乙限遺跡1】		
第3図	乙限遺跡1 遺構平・断面図(S=1/20)	4
第4図	乙限遺跡1 出土遺物実測図(S=1/4, 拓本はS=1/2)	5
【乙限遺跡2】		
第5図	乙限遺跡2 遺構配置図(S=1/100)	8
第6図	1～4号土坑 平・断面図(S=1/40)	9
第7図	3・4号土坑・試掘トレンチ 出土遺物(S=1/4)	10
第8図	5号土坑 平・断面図(S=1/40)	11
第9図	5号土坑 出土遺物(1)(S=1/4)	13
第10図	5号土坑 出土遺物(2)(S=1/4)	14
第11図	5号土坑 出土遺物(3)(S=1/4, *付は1/6)	15
第12図	5号土坑 出土遺物(4)(S=1/4, *付は1/6)	16
第13図	6～9号土坑 平・断面図(S=1/40)	17
第14図	6～10号土坑・1号溝状遺構 出土遺物(S=1/4)	19
第15図	10～12号土坑 平・断面図(S=1/40)	20
第16図	1号溝状遺構 土層断面図(S=1/40)	21
第17図	乙限遺跡周辺の文化財遺跡	23
【前沢遺跡】		
第18図	前沢遺跡 遺構配置図(S=1/60)	24
第19図	1・2号土坑 平・断面図(S=1/40)	26
第20図	3号土坑 平・断面図(S=1/40)	27
第21図	1号溝状遺構 平・断面図(S=1/40)・遺物出土状況(S=1/20)・28	
第22図	出土遺物(1)(S=1/4)	29
第23図	出土遺物(2)(S=1/2)	30
第24図	前沢遺跡と周辺の遺跡(S=1/2,000)	31

写真図版目次

【乙限遺跡1】

- 図版1 ①乙限遺跡1 次遠景
②土器検出状況(北から)
③土器検出状況(東から)

- 図版2 ①乙限遺跡1 土器絵画部分詳細
②乙限遺跡1 嗣下層の調査痕もしくは線刻

【乙限遺跡2】

- 図版3 ①乙限遺跡2 遺構検出面全景(南から)
②乙限遺跡2 検出面下層全景(北から)
- 図版4 ①4号土坑 完掘状況(東から)
②5号土坑 土層断面(西から)
③5号土坑西半部 遺物出土状況(南から)
④5号土坑東半部 遺物出土状況(南から)
⑤8号土坑 完掘状況(南西から)
⑥10号土坑 完掘状況(南東から)
⑦1号溝状遺構 完掘状況(北西から)
⑧7号土坑・12号土坑 完掘状況(北から)

- 図版5 出土遺物(1)

- 図版6 出土遺物(2)

【前沢遺跡】

- 図版7 ①前沢遺跡 全景(東から)
②1号土坑 土層断面(東から)

- ③2号土坑 完掘状況(北東から)

- ④3号土坑 土層断面(東から)

- ⑤調査風景

- 図版8 ①1号溝状遺構 土層断面(西から)
②1号溝状遺構 遺物出土状況(南から)
③1号溝状遺構 完掘状況(南東から)
④2号溝状遺構 完掘状況(北東から)
⑤出土遺物

第1章 調査の経過と組織

乙隈遺跡2、前沢遺跡の調査は、平成26年度に個人住宅建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」が提出されたことに始まる。これを受けて小都市教育委員会では建設予定地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認したため、発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、地権者、施工業者と教育委員会で協議を行い、平成26年度国庫補助事業の一環として建物部分の発掘調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得ている。

なお乙隈遺跡1については、平成22年12月20日に個人所有の畑地で牛蒡の収穫中に土器が発見された旨の連絡が教育委員会に入り、地権者の承諾を受けて急遽記録のための調査を実施した。それぞれの調査の経過と組織については下記のとおりである。

【乙隈遺跡1】

平成22年12月20日 人力による掘削（1m程度）を行い、弥生時代後期の完形壺を確認した。検出状況の図面記録、写真撮影を行い、土器を取り上げたのち、人力による埋戻しを行った。

【乙隈遺跡2】（事前審査番号14010）

平成26年6月20日重機による表土剥ぎ開始 25日人力による遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成および写真撮影を実施 7月2日～10日豪雨および台風8号のため調査地水没、作業中断 25日第1遺構面全景写真撮影 28日第2遺構面検出・遺構掘削、全景写真撮影ののち埋め戻し実施・完了

【前沢遺跡】（事前審査番号14022）

平成26年8月6日重機による表土剥ぎ開始 18日人力による遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成および写真撮影を実施 28日全景写真撮影 9月3日埋め戻し実施・完了

各調査とも、現地調査終了後は図面・遺物整理作業及び報告書作成を実施している。

<調査の組織>

【乙隈遺跡1】

小都市教育委員会	教育長	清武 輝
	部長	赤川芳春
	文化財課長	田籠千代太
	係長	片岡宏二
	技師	山崎頼人

【乙隈遺跡2・前沢遺跡】

小都市教育委員会	教育長	清武 輝
	部長	佐藤秀行
	文化財課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	上田 恵

【乙隈遺跡】



【前沢遺跡】



第1図 調査地位位置図 (S=1/5000)

※各図面内の数字は調査次数を示す



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

第2章 位置と環境

(1) 地理的環境

小郡市は、福岡県内最大の平野である筑紫平野の北に位置する。宝満山から派生する宝満川が市域の中央部を南流しており、これに二分された流域に高原川・草場川・鎌倉川などの支流が走行している。宝満川の東岸、朝倉郡筑前町との境界には、標高130.6mの花立山（城山）があり、これが市域で最も高い地点となる。ここから南西へ向かって舌状に台地が延び、宝満川周辺の三角州性低地へとつながる。西岸には、佐賀県脊振山系から派生する低丘陵（通称・三国丘陵）があり、これが南へ行くにしたがって扇状段丘となり、低台地を経て平野部へとつらなる。今回調査した乙隈遺跡は宝満川東岸の、前沢遺跡は西岸の台地上に、それぞれ所在している。

(2) 歴史的環境

小郡市内では、これまでの発掘調査や採集資料などから、旧石器時代から人々の生活が営まれていたことが明らかとなっている。遺跡の分布や発掘調査事例には疎密があるが、市域のほぼ全体に埋蔵文化財が存在することを確認している。とりわけ宝満川西岸の低丘陵上では、大規模な宅地造成に先立って多数の遺跡の発掘調査が行われている。これらは開析谷を隔てた丘陵単位で調査が実施されており、弥生時代の集落様相とその展開についてさまざまな情報が提示され、小郡市を全国的に「歴史の宝庫」と知らしめる契機となった。以下、今回調査地の周辺に分布する遺跡を中心に、当該地域の歴史的環境の概要を示す。

旧石器時代・縄文時代の遺構・遺物は、花立山周辺や三国丘陵上で散見されるが、一定のまとまりをもって検出された例はまだない。大崎井牟田遺跡（27）では早期の集石炉に伴う土器が出土しており、集落こそ確認されていないが、すでに人々の生活の場であったと推測される。

弥生時代以降、三国丘陵を中心に生産域と集落の開発が進行し、大々的な開発が進められるようになる。まず前期の初め、三国丘陵の南端に力武遺跡群（力武内畑・前畑遺跡）（14）が成立し、その後そこから分化したと考えられるみに保育所遺跡（13）や、同時期の木棺墓群・甕棺墓群が広がる横隈上内畑遺跡（12）にも人々が進出する。やがて集落・墓域はより丘陵の上部へと移動し、北松尾口遺跡（9）、三沢北中尾遺跡（10）、横隈山遺跡（11）、一ノ口遺跡（8）のようにその規模も拡大していく。中期に入ると、三国丘陵上の集落が散在しながらも継続して経営されるのと並行して、小郡（24）・大板井遺跡（25）や小郡若山遺跡（23）のように市域中央部の低台地にも新たな集落が成立していく。また、南部にも大崎中ノ前遺跡（29）、八坂石塚遺跡（32）といった集落が見られるようになる。宝満川の東岸でも、竪穴住居群と墓域が併存する井上北内原遺跡（20）、井上小松山遺跡（19）などが現れる。続く後期の集落には、三国の鼻遺跡（6）や三沢南崎遺跡（15）、乙隈天道町遺跡（16）、小板井屋敷遺跡（26）があるが、前段階の集落との関連性や継続性には不明瞭な点が多い。

古墳時代になると、三国丘陵では津古生掛遺跡（5）をはじめとする津古遺跡群が、中南部では大崎小園遺跡（28）や寺福童遺跡（30）、福童町遺跡（31）が成立し、一時活発な集落経営が認められる。また、津古生掛古墳（5）から津古1号墳（3）、2号墳（4）、三国の鼻1号墳（6）と、古墳時代前期の首長墓の系譜を示す古墳群も確認されている。後期には、宝満川西岸の三沢古墳群（7）と東岸の花立山古墳群（18）で、それぞれ群集墳が築造される。前者では馬を埋葬した土壇墓が、後者では副葬品として馬具が多数見られ、渡来系の人びととの交流がうかがえる。

律令期以後は、集落の展開に大きな変化が見られる。干潟遺跡群（17）のような大規模な集落が成立し、上岩田遺跡（22）、小郡官衛遺跡（24）、井上庵寺（21）のような公的施設の設置が行われる。前段階の集落経営とは異なり、中央権力の地方波及の影響が垣間見える。

中・近世は近年の発掘調査によって歴史的様相が復原されつつあるが、横隈上内畑遺跡や小板井屋敷遺跡など、旧筑前街道沿いの村落に関する資料が確認されている遺跡はまだわずかである。

このように今回調査地の周辺では、弥生時代以来ほぼ連続と人間生活の営みが続けられてきた。

第3章 調査の成果

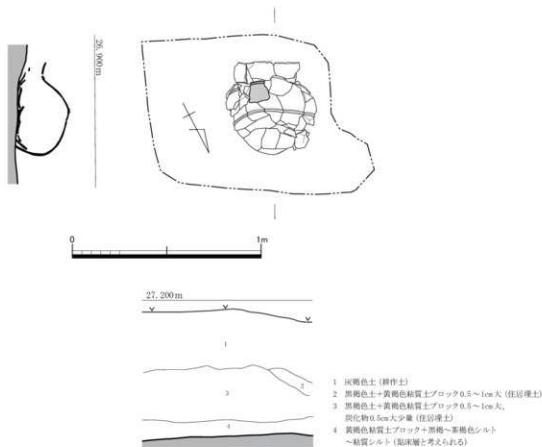
(1) 乙隈遺跡1

【遺構と遺物】

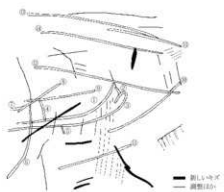
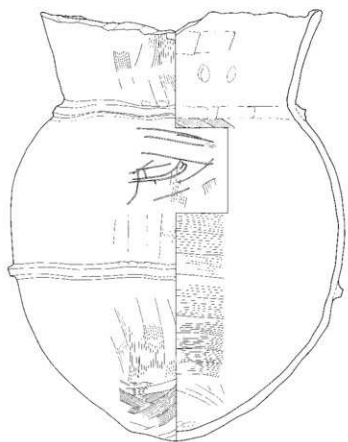
1号住居 (第3図、図版1)

乙隈遺跡1は先述の通り、最小限の掘削面積で、地権者により発見された土器の取り上げと記録を行っている。およそ80cm×1mの範囲のみを掘り下げた。30cm程耕作土が堆積しており、その下に遺構埋土である黄褐色粘質土ブロック混じりの黒褐色土が25cm程あった。遺構埋土下は黄褐色粘質土ブロックにわずかに黒褐色～茶褐色シルトを含む層で、これは住居の貼床層と考えられる。なお、住居の構造等は掘削範囲では不明である

発見された土器は器高50cm程度の壺で、横に倒れて検出された。下面に接した部分のみ割れて水平に破片が分布している。このことから、住居の床面が存在し、そこに接した部分のみ自重で押しつぶされた状態であったことがうかがえる。検出した土器の天側の肩部(頭部突帯と胴部突帯の間)には、線刻様の抽象画が確認されている(第3図 土器検出状況のアミをかけた部分)。



第3図 乙隈遺跡1 遺構平・断面図 (S=1/20)



第4図 乙隈遺跡1 出土土器実測図 (S=1/4, 拓本はS=1/2)

出土遺物（第4図、巻頭図版）

遺跡発見の契機となった壺である。口縁部は外側から打ち欠かれており、本来は袋状口縁であったと考えられる。現器高は55.1cmである。頸の径が24.4cmを測り、かなり広くなっており、締まっている。最大径はやや胴部の上位にあり、肩が張るプロポーションである。底部は丸底となっている。器厚は0.7～1.0cmで、接合痕が5～6cmの幅で確認できる。倒卵形の胴部中央と頸胴部境にM字突帯がつき、突帯の高さは頸胴部境が0.8cm、胴部中央が0.7cm程である。頸部突帯径は26.6cm、胴部突帯径は35.4cmである。いずれの突帯も、均一の高さで水平に貼り付けられているのではなく、うねりを伴う。外面は粗いハケメが縦方向にみられ、内面も粗いハケメが横方向にみられる。底部付近は内外面とも、斜め方向のハケメが連続する。ハケメ調整の後、ナデを施すが、ハケメ痕跡は比較的残っている。胴部上位から頸部は比較的ナデが丁寧に行われており、内面頸部は板状工具によるナデで仕上げられている。内面の頸胴部境は斜めハケメ調整後、板状工具ナデで消されており、頸胴部境に面を持っている。肩部には棒状黒斑、また、胴部突帯部には二次被熱痕が確認できる。弥生時代終末期の所産である。

その他にも、甕や壺の小片が埋土中から出土した。周辺の畑からも土器が表探で、高坏脚部片、くの字口縁の甕などが出土している。

線刻絵画（第4図、巻頭図版、図版2）

頸部付け根の突帯下、胴部上位に線刻による抽象画が描かれている。胴部上位は縦方向のハケメ後、ナデで仕上げているが、特にこの線刻画の範囲は丁寧にナデが行われている印象を受ける。

線刻は焼成前に行われたか、焼成後に行われたか、判断が難しい状態である。観察者によってその判断も分かれた。本報告では、線刻部分がミガキ状の光沢を持つことから、焼成前に線刻された可能性を考えている。

この土器には、製作時における多くの調整痕やキズ、発掘調査・整理時についた新しいキズがある。まずは、ひとつひとつの線が調整によるものか、新しいものか、線刻によるものかを判断しなければならぬ。拓本（第4図下段右）には新しいキズも含めて写し出されるため、それとは別に線の種類を示した模式図を作成した（第4図下段左）。二重線で示したものが線刻と推定したもので、単線で示したものが調整痕や擦痕と判断したもので、黒く塗りつぶしたものが新しいキズと判断したものである。調整痕には、ハケメや工具痕などがある。土器の調整方向は、胴部上位ではおよそ縦方向のハケメや工具ナデ、頸胴部境の突帯付近では横走行のナデ擦痕が認められるので、線種判断の参考とした。また、この部分とは別に胴部下位にも、意図したものでないと考えられる縦方向から斜め方向の線がみられたので、参考に写真を掲載している（図版2）。

線刻部分はおよそ一つの破片で取まっている。線刻を観察すると、正面左側に若干のびている可能性も考えられるが、土器が一部欠失する部分があり、不明である。破片も含めて、再度探索したがみつからなかった。

線刻部分は上位で、左上から右下にやや傾斜を持ち、1cm間隔で併行する6～7cmの長さの線がある（⑬・⑭）。上の線は途中から二本となり、加えられた線は長さ4cm程度である（⑮）。

線刻部分中央には、右側で弧状を描き、左側へ直線的に流れる二本の併行する線がみられる（①③）。下の線（②）は、上端では鈎状を呈している。その鈎状を呈する部分（③）と上の線（①）の間には短い線（④）が確認され、この上下の併行する線（①③）を結合する。鈎状を呈する線（③）の中央部には、斜め左への長さ4mmの短い線（⑤）が付けられている。中央2本線（①③）を描いた後に、上の線の直線部分に縦方向の長さ1cmの線（④）が付けられている。その左側には同様の高さからおおよそ併行して左へ払う長さ4cmの線（⑥）がひかれている。その左払いの線（⑥）の上端には横方向の短い線（⑦）とそれを切る斜め右にある線（⑧）がある。それらを切るかたちで、中央2本（①③）の直線部分に平行する直線（⑨）が1cm上位にあり、中央2本線（①③）の右端へとのびている。この中央部分やや下方に描かれた刻線を中心主題と考えた場合、中心主題の外側に、左側上下から右

側の中央に向かって伸び、短く交差する線がある(⑩⑫)。線刻の一番下位には、鉤状を呈する線(③)の1.5cm下で、右上から左下へ向う長さ4cmの直線が確認できる(⑪)。この直線は中央部で交わる線の下方(⑩)とおおよそ併行に描かれ、それを切る⑬は上位の併行する線(⑬⑭⑮)と同じ方向を示している。

中心主題は何か

鉤状の線(③)とそれに併行する線(①)を船の側面観の表現とみたい。この鉤状部分(③)と短い線(②)でつらなる上線(①)の右端を船首部分の表現とする。ただし、船尾部分は左側の接合部分(破片の失われた部分)へ延長しており、中央2本線(①③)の取束の仕方がわからない。欠失部分は幅1cm程であり、欠失部分より左側の破片には線刻が認められないことから、その範囲内で取るようだ。

船の画題では、全体を側面観で描き、櫂が平面形で表現されることが多い(佐原2001)。福岡県調地頭給遺跡(弥生時代後期)や静岡県角江遺跡(弥生時代中期)、鳥取県青谷上寺地遺跡(弥生時代後期)、大阪府久宝寺遺跡(弥生時代終末から古墳時代前期)から出土した部材から、弥生時代には、準構造船が存在したことが窺える。弥生土器に描かれた絵画にも、船の船首や船尾が立ち上がる表現が多くみられ、準構造船の表現と考えられる。これまでの類別では、複数で数多くの櫂とその水かき部分が表現されるが、この絵画にはいわゆる櫂にあたる表現が見当たらない。

船の側面観の表現とした場合、A. 鉤状の表現のある船首部分が貫型の構造で、軸が2つ見えている表現なのか、B. 堅板型の構造で、丸木舟の部分と軸の表現であるのかの二通りが考えられる(柴田2013)。

前者の場合、船体上位にみられる横に走る直線が覆い屋の表現の可能性も考えることもできる。この場合は、すべてが側面観で描かれている。

後者の場合は上位にみられる横に走る直線が船体の奥のラインと考えることもできようか。その場合、船の内部が平面表現となっており、船の内部には隔壁(仕切板)の表現(④)、斜めに走る線(⑧)やそれと交わって始まる左払いの線(⑥)は櫂の表現と考えることもできるかもしれない。これまでみられる弥生絵画では、軸が斜め横から、中央部分が真横から描かれている傾向があるので、少し異なる表現方法ではある。

推定船首の先で交わって、船体の外側に描かれた上位や下位の線は、それぞれで方向が一致しており、船が波をかき分けていく表現を俯瞰視点で示した可能性も考えられる。

乙類遺跡は宝満川を望む台地上に立地している。中心主題を船とした場合、当時、宝満川を行き交う準構造船が見られたことが想像できる。

この資料については、深澤芳樹(奈良文化財研究所)、常松幹雄・久住猛雄(福岡市経済観光文化局)、江野道和(糸島市教育委員会)の各氏よりご教示を受けた。記して、感謝いたします。

参考文献

石井謙治 1995『和船』Ⅰ・Ⅱ(ものとの人間の文化史76-1)法政大学出版局

佐原 真 2001『弥生・古墳時代の船の絵』『考古学研究』第48巻第1号

深澤芳樹 2003『弥生時代の船、川を遡り、海を渡る』『弥生創世記—検証・縄文から弥生へ—』弥生文化博物館

深澤芳樹 2005『船の出現と弥生船団』『考古学ジャーナル』536ニューサイエンス社

大阪府立弥生文化博物館 2013『弥生人の船—モンゴロイドの海洋世界—』平成25年度夏季特別展展示図録

柴田昌晃 2013『古代瀬戸内海における海上活動に関する一詩論』『弥生研究の群像』大和弥生文化の会

君島俊行 2015『青谷上寺地遺跡の船』第6回青谷上寺地遺跡フォーラム。人・もの・心を運ぶ船。鳥取県埋蔵文化センター

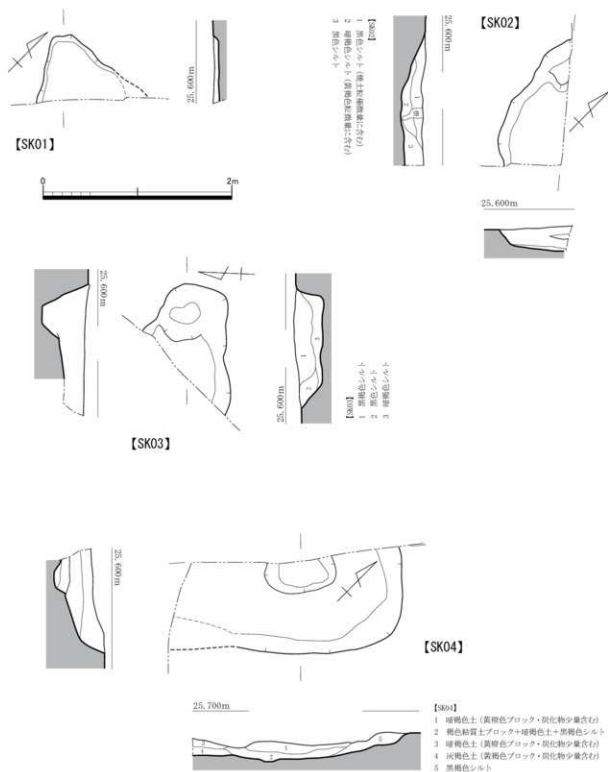


第5図 乙限遺跡2 遺構配置図 (S=1/100)

(2) 乙限遺跡2

【調査の概要】

乙限遺跡は、宝満川の東岸、支流である草場川北岸の台地上に位置する。筑前町（旧・夜須町）との市町境に近接しており、遺跡は筑前町側へも延長すると考えられる。この遺跡は、昭和36年に畑地から銅戈2本が発見され、翌年に雑誌『九州考古学』において報告されたことで広く知られるよう



第6図 1～4号土坑 平・断面図 (S=1/40)

になった。その後、県道久留米筑紫野線建設工事に先立ち、福岡県教育委員会によって乙限天道町遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代末から古墳時代初頭を主体とする集落遺跡が確認されている。

今回の調査対象地は、江戸時代の参勤交代道である薩摩街道に面しており、筑前筑後国境石から南に250m程度の位置にあたる。第1遺構検出面は、基盤層である褐色ローム層の直上に堆積した黒色シルト層で、標高は25.5m前後であった。その後基盤層を第2遺構面として調査しているが、第2遺構面で見出した遺構は小ピット数基にとどまる。発掘調査前は畑地で、耕作土内からも多数の土器片が出土しているが、いずれも弥生時代後期のもので、近世の資料は認められなかった。

【遺構と遺物】

1号土坑（第6図、図版3）

調査区東隅に位置し、2号土坑に切られる。遺構の大半は調査区外にあり、上部は削平を受けていて残存状況は非常に悪い。主軸・平面プランは不明である。検出最大長0.7m、検出幅1.15m、確認した深さは5cm程度である。東端は表土掘削の際に削平してしまったため、調査区壁面の土層から復元を行っている。

埋土から弥生土器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

2号土坑（第6図、図版3）

調査区東隅に位置する。1号土坑を切り、遺構の大半が調査区外のため、主軸・平面プランは不明である。検出最大長1.3m、検出幅0.7m、深さは最大で0.2mを測る。北側にテラスを持ち、壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。埋土は黒色シルトを主体とする水平堆積である。

少量の弥生土器が出土しているが、いずれも小片であった。

3号土坑（第6図、図版3）

調査区南東辺に位置し、東半部は調査区外へ延長する。平面プランは不明であるが、主軸は東西方向と考えられる。検出最大長1.3m、最大幅0.9m、深さ0.3mを測る。西端は深さ0.2mのピット状に掘り込まれており、壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを主体とする水平堆積である。

出土遺物（第7図）

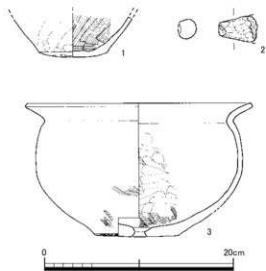
埋土からは弥生土器が出土している。1は壺の底部で、体部外面は工具ナデのちナデ消し、底部はヘラケズリ、内面はハケ調整を施している。弥生時代後期の所産である。

4号土坑（第6図、図版4）

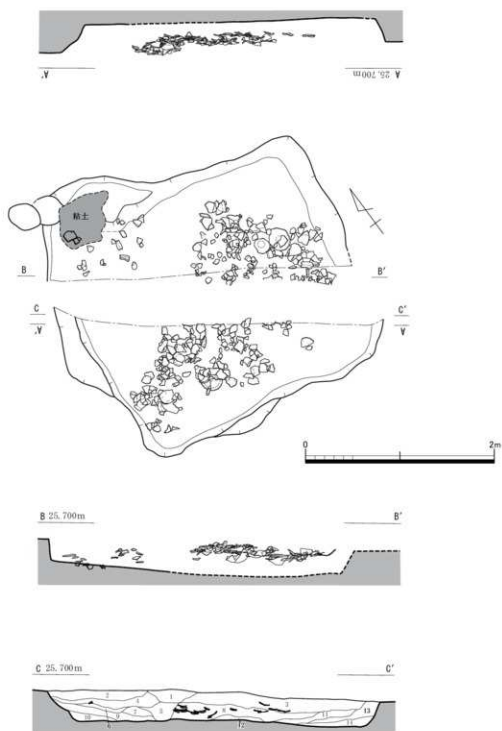
調査区西隅に位置し、遺構の大半は調査区外へ延長する。上部が大幅に削平されており、残存状況は非常に悪い。南端は表土掘削の際に削平してしまったため、調査区壁面の土層から復元を行っている。7・12号土坑を切る。主軸方向は不明であるが、平面プランは隅丸方形と考えられる。検出最大長2.4m、検出幅1.0m、深さ最大0.4mを測る。底面中央部にピット状の掘り込みが見られる。埋土は暗褐色土を主体とする水平堆積である。

出土遺物（第7図）

弥生土器の破片がごく少量出土している。2



第7図 3・4号土坑・試掘トレンチ 出土遺物 (S=1/4)



【説明】

1 黄褐色～灰黄褐色砂質土

2 粉～灰黄褐色土

3 黒褐色シルト（黄褐色粘層微量に含む）

4 灰黄褐色土（黄褐色粘層土粒少量含む）

5 黄褐色砂質土（黄褐色粘層少量含む、しまり非常に悪い）

6 黄褐色粘層土→黒色シルト

7 灰黄褐色土（シルト分を含む）

8 黒褐色砂質シルト（黄褐色粘層少量含む）

9 暗褐色シルト（黄褐色粘層量に含む）

10 褐色シルト

11 黒褐色シルト（黄褐色粘層微量に含む）

12 褐色シルト

13 暗褐色シルト（黄褐色粘層微量に含む）

14 黒色シルト

第8図 5号土坑 平・断面図 (S=1/40)

は把手部分で、直線的に延びるタイプである。全体に細かい単位でナデ仕上げを行っている。

5号土坑（第8図、図版4）

調査区中央の東寄りに位置する。主軸は東西方向で、平面プランは長方形を呈する。なお、北西隅に粘土の広がりを確認したため、幅0.5mの半円形のテラスが附属すると判断して調査を行った。長さ3.1m、幅2.6m、深さ0.35mを測る。埋土は灰黄褐色土と黒褐色シルトの互層で、検出段階から多量の土器を確認している。特に上層と下層の境界付近で、残存状況が良好な資料がまとまって出土している。遺物の検出レベルは、南西から北東にかけて若干傾斜している。また、任意で土層観測用のベルトを設定したが、このベルトを隔てた南北それぞれの区画で出土した土器片が、1個体として接合できる例が多く見られた。5号土坑の出土遺物は、何らかの理由で一括廃棄されたと考えられる。

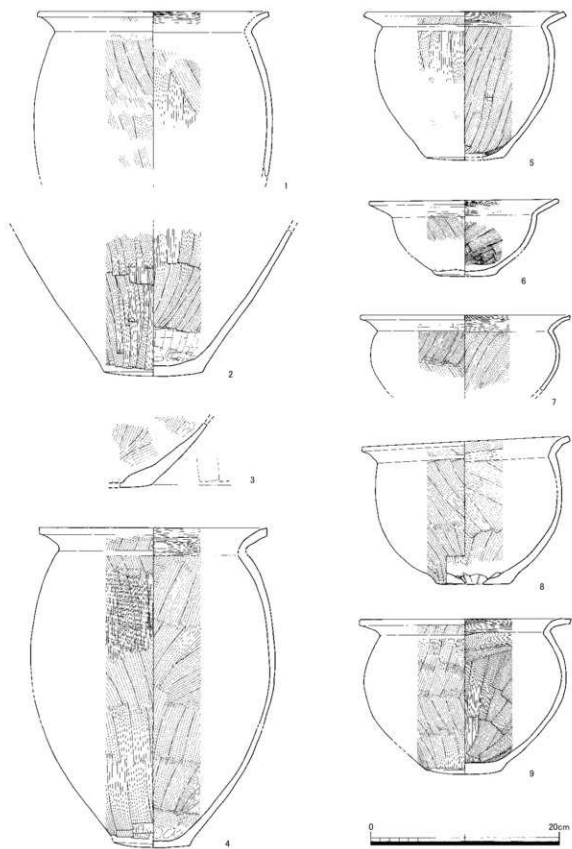
遺構の形状および規模から、検出当初は竪穴住居の可能性を想定していたが、遺構底面に柱穴等の施設は確認できなかった。また、埋土にも貼床状の堆積は認められなかったため、本報告では土坑として取り扱っている。

出土遺物（第9～12図）

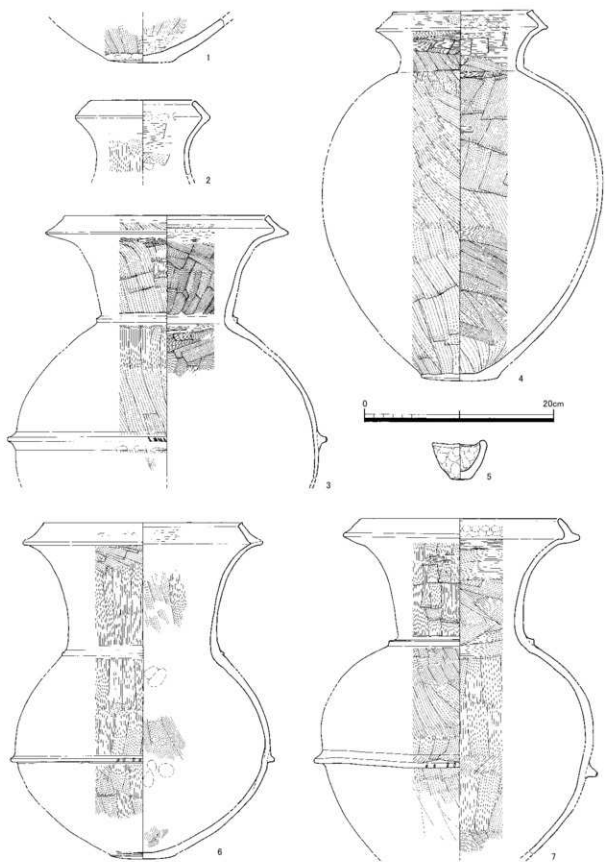
今回の調査区内で最も遺物の出土量が多い遺構であり、器形も多岐に渡る。第9図の1は甕の上半部で、外面にはまばらにススの付着が見られる。口縁部は頸部から反り返って延び、内外面ともハケ調整を施す。2は壺の下半部である。外面は底部を含めハケ調整、内面は底部との接合部をナデ、その他はハケ調整で仕上げている。4は完形の甕。内面は口縁部・体部・底部のそれぞれで方向の異なるハケ調整、外面は全面タテハケを施す。外面の肩部のみ、ハケ調整前のタタキ痕跡が残る。体部外面の下半部は、器壁の剥離と被熱による赤変が顕著であることから、煮炊きに使用したものと考えられる。5～9は広口の鉢である。いずれも内外面とも丁寧なハケ調整で仕上げられている。5は底部がやや丸みを帯びているが、非常に薄い。体部下半部から底部にかけて、口縁部にそれぞれ黒斑が見られる。6は体部が外広がりに延びる、口径が大きいタイプのもの。外面は全体に破損が多く、特に体部下半部の剥離が著しい。7は上半部のみであるが、他のものと比べて器壁が薄い。口縁部は緩く湾曲して外反し、端部はナデにより平坦面を形成している。残存部分全体に黒斑が認められる。8は平底のもので、口縁部はやや厚く、外側に湾曲して延びる。焼成後、底部中央に内側から打ち欠くことで穿孔を施している。9は底部が厚いレンズ状を呈するもので、口縁部は外側に向かって著しく湾曲する。内外面とも丁寧なハケ調整を施しており、体部下半部から底部にかけて黒斑が見られる。

第10図の1は壺の底部で、内外面とも体部はハケ、底部はナデ調整を施す。2～4、6・7は複合口縁壺である。2は口径が小さく、口縁部の折り返し角度が鈍い、やや古手のもの。口縁端部から頸部外面にかけて黒斑が見られる。3は体部が大きく張り出し、頸部と体部中に突帯を巡らすタイプのもの。口縁部の折り返し部分に斜め方向のハケ調整と黒斑が残っている。4は肩が張った体部に短い頸部が取り付くタイプのもの。形状としては甕に近いが、ここでは壺として扱った。外面には、口縁部から体部下方面での各所に黒斑が見られる。6は体部と頸部の接合部分の屈曲が非常に緩く、頸部の器壁が薄い。7は体部に巡る突帯が、最も張り出した部分よりやや下位に貼りつけられている。また口縁端部が、他の袋状口縁壺とは異なって丸みを帯びている。5は手捏ねのミニチュア土器。今回の調査区内では唯一の出土である。

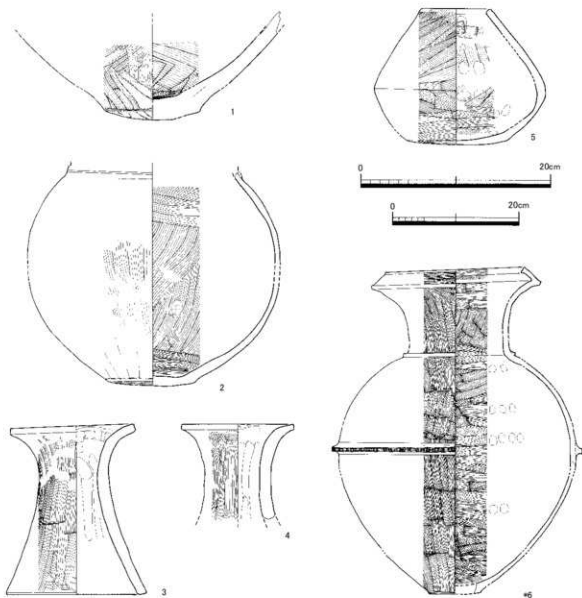
第11図の1は底部がレンズ状を呈する壺であるが、今回出土した遺物の中で最も厚みがあり、大型の資料となる可能性が高い。内外面ともハケ調整を施す。2は小型壺の体部で、頸部より上が欠損している。底部は平底に近いレンズ状で、外面に黒斑が認められる。外面の器表が摩滅しているため不明瞭であるが、内外面ともハケ調整を施していると思われる。3・4は筒型器台である。3は裾部の内外面に部分的にタタキ痕跡が残る、外面はタテハケ、内面はナデ調整で消している。5は無頸の壺。体部は内外面ともハケ調整を施すが、内面に指圧痕が多数残る。この土器のみ、胎土に砂気を多く含んでおり、他の出土遺物と粘土の質感が異なる。6はほぼ完形の複合口縁壺である。口縁部は粘土帯の接合で折り返し部分を形成しており、頸部に断面三角形、胴部に断面台形の突帯を巡らす。体部内



第9図 5号土坑 出土遺物(1) (S=1/4)



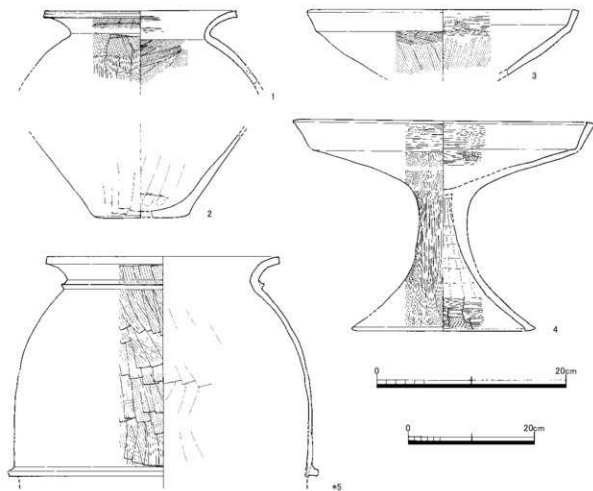
第10图 5号土坑 出土遗物(2) (S=1/4)



第11図 5号土坑 出土遺物(3) (S=1/4, *付は1/6)

面には、粘土帯接合箇所に沿って指頭圧痕が規則的に残存し、その上からヨコハケを施している。

第12図の1・5は甕の上部。1は口縁端部の断面がナデによって緩いM字形を取るタイプのもの。体部はハケ調整、頸部はハケとナデの併用で調整している。5は口縁部より体部径の方が広い、大型のもの。頸部に断面三角形、体部中位に断面台形の突帯を巡らす。突帯とそのやや上部にかけて黒斑が残る。器壁はタテハケのち工具ナデで仕上げている。2は壺の底部で、内外面とも工具ナデ調整を施す。外面全体に黒斑が見られる。3は高坏の坏部で、器壁にやや厚みがある。外面はハケ調整、内面はヘラミガキを施す。口縁端部の外面に黒斑が認められる。4はほぼ完形となる高坏である。口縁端部は平坦面を持つ。口縁外面から坏部の内面にかけては横位のヘラミガキ、坏部外面と脚部は縦位のヘラミガキを細かい単位で施す。脚部内面はヘラケズリとハケ調整で丁寧に仕上げられている。



第12図 5号土坑 出土遺物(4) (S=1/4, *付は1/6)

6号土坑 (第13図、図版3)

調査区北西に位置する。主軸は北東—南西方向で、平面プランはややいびつな円形を呈する。東端が8号土坑と接するが、明瞭な切合い関係は確認できなかった。遺構の上面は削平を受けており、残存状況は比較的悪い。長さ、幅とも1.2m、底面までの深さは10cm程度で、壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。中央には深さ0.15mの不整形の掘り込みが見られる。

出土遺物 (第14図)

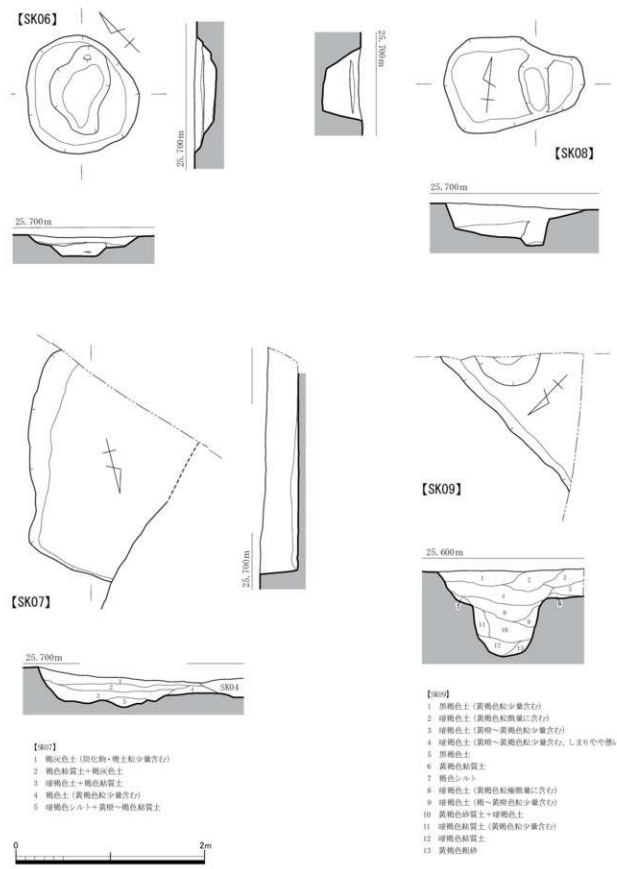
埋土から少量の弥生土器が出土している。1は甕の底部で、外面にススの付着が見られる。器表の摩滅により調整は不明瞭であるが、体部外面は工具ナデのちナデ消し、底部はナデ調整で蓆状の痕跡がかすかに残存している。弥生時代後期の所産である。

7号土坑 (第13図、図版)

調査区西側に位置する。上部は削平を受けており、4号土坑に切られ、11・12号土坑を切る。遺構の大部分が調査区外であるが、主軸は北西—南東方向、平面プランは方形もしくは長方形と推定される。遺構の底面には部分的に凹凸が見られる。長さ2.35m、検出幅1.8m、深さ0.4mを測り、壁面は緩く傾斜して立ち上がる。埋土は褐色粘質土を主体とし、水平堆積の体裁を取る。

出土遺物 (第14図)

弥生土器片が中量出土している。2は大型甕の口縁部で、頸部のくびれ部分に断面三角形の突帯を持つ。内外面にヨコハケを施し、外面にわずかにススの付着が見られる。3は杵形器台で、外面全体



第13図 6~9号土坑 平・断面図 (S=1/40)

にタタキを施したのち、肩部を掴み出して耳を形成している。内面上部は絞り込み痕跡をナデ消し、下部はヨコナデ調整である。器台頂部の中央は5mmほどくぼんでいる。

その他、玄武岩製の石斧片が出土している。

8号土坑（第13図、図版4）

調査区中央北寄りに位置し、北西隅が6号土坑と接する。主軸は東西方向で、平面プランは不整形円形を呈する。底面に楕円形の掘り込みが、東端には幅0.25mのテラスが見られる。長さ1.45m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。

出土遺物（第14図）

埋土から一定量の弥生土器が出土している。4は甕の体部である。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を施す。底部近くに部分的にススの付着が見られる。5は壺形器台の上部で、外面は被熱により赤変している。外面は工具によるタテナデ、内面は絞り込み痕跡をナデ消しており、頂部中央に直径8mmの穿孔を施す。6は短頸の壺で、体部の器壁は厚く、頸部から口縁部が非常に薄いタイプのものである。器表が全体的に摩滅しているが、外面は上部にタテハケ、下部に横方向の工具ナデ、内面は工具ナデのちナデ消しを施している。7は広口の鉢である。口縁部は頸部からくの字に屈曲して立ち上がり、端部はナデ調整による平坦面を持つ。外面上部はタテハケ、下部は工具ナデのちナデ消し、内部はハケ調整を施す。器壁の厚みはほぼ均質である。

9号土坑（第13図、図版3）

調査区南隅に位置し、遺構の大半は調査区外に所在する。主軸は正方位に近い南北もしくは東西方向、平面プランは方形と思われるが詳細は不明である。10号土坑を切り、底面東寄りに深さ0.55mの円形ピットを持つ。東西検出長2.0m、南北検出幅1.1m、深さ0.35mを測る。埋土は暗褐色土を主体とする水平堆積である。

出土遺物（第14図）

埋土からほぼ完形の資料が出土しているが、点数は少ない。8は広口の鉢で、口縁部の屈曲が非常に緩いタイプのもの。外面上部はタテハケ、中位から下部は手持ちヘラケズリ、内面は工具ナデ調整を施す。9は丸底の鉢である。外面は中心の抜けた黒斑があり、手持ちヘラケズリ調整、内面はナデ調整を施している。10は小型丸底壺で、口縁部がやや外反して立ち上がるもの。体部外面は手持ちヘラケズリ、内面はヨコハケとナデ調整で仕上げている。11は土師器の鉢である。体部は緩く湾曲しながら斜め方向に立ち上がる。外面は下部にヘラケズリを施したのちハケ調整、内面は上部ハケ調整、下部工具ナデで仕上げている。底部外面にヘラ記号状の痕跡が見られる。

10号土坑（第15図、図版4）

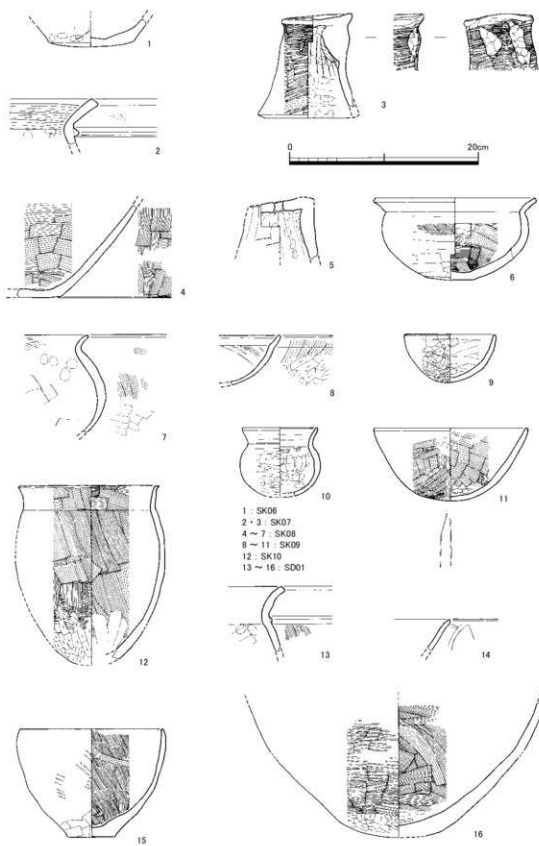
調査区南隅に位置する。9号土坑に切られ、遺構の大半は調査区外へ延長する。上部が大幅に削平されており、遺構の残存状況は悪い。主軸は南北方向、平面プランは隅丸方形と思われるが、詳細は不明である。残存長2.8m、検出幅2.9m、深さ0.15mを測る。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がり、遺構底面は平坦である。

出土遺物（第14図）

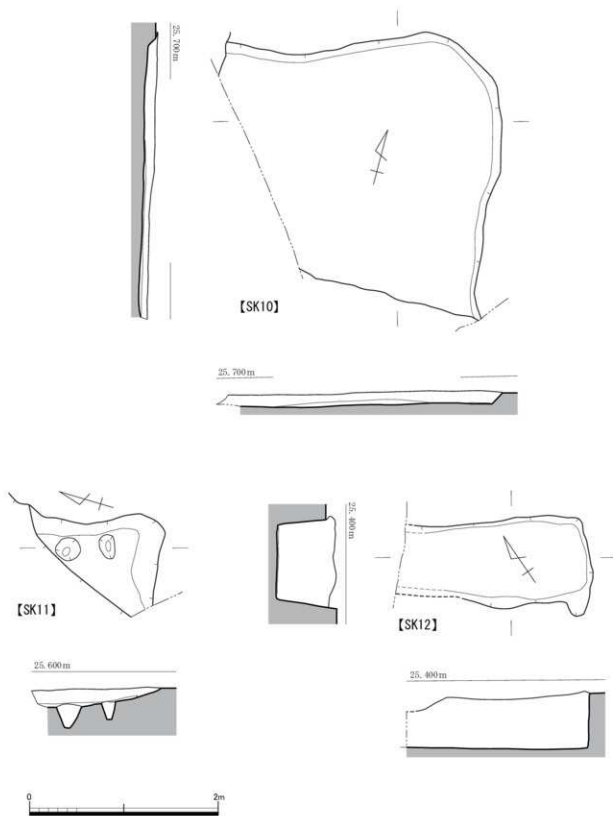
土器片が一定量出土しているが、残存状況が良好なものは少ない。12は小型の甕である。口縁部はほぼ直立して立ち上がり、指オサエによって端部を短く外反させる。外面は上部をタテハケ、下部をヘラケズリで仕上げ、のちに下部にタタキを施す。内面は大半がハケ調整であるが、底部のみナデ消しており、部分的にススの付着が見られる。

11号土坑（第15図、図版4）

第2遺構面で検出した。調査区西隅付近に位置し、7号土坑に切られる。上部は大きく削平を受け



第14图 6~10号土坑·1号溝状遺構 (S=1/4)



第15図 10～12号土坑 平・断面図 (S=1/40)

ている。主軸は正方位に近い南北もしくは東西方向、平面プランは方形と思われるが、詳細は不明である。南北検出長1.0m、東西残存幅1.45m、深さ0.2mを測る。底面で円形ピット2基を確認しているが、遺構に伴うものではない。

弥生土器片がわずかに出土しているが、いずれも細片であり、図示は控えている。

12号土坑（第15図、図版4）

調査区西隅に位置する。4・7号土坑に切られる。11号土坑との先後関係は不明である。検出時は墓塚の可能性も想定していたが、そう判断出来る痕跡は確認できなかった。主軸は北西—南東方向で、平面プランは長方形を呈する。壁面は直立して立ち上がり、底面は非常に平坦である。検出長2.0m、幅0.95m、深さ0.6mを測る。

出土遺物は弥生土器の細片がごく少量と、粘板岩製の砥石片1点のみであった。

1号溝状遺構（第16図、図版4）

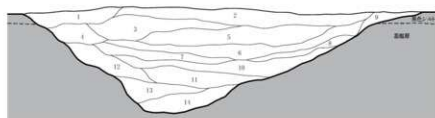
調査区北半部を東西方向に走行する。断面は漏斗形に近いV字形を呈する。検出幅2.1m、底面幅0.25m、深さ1.2mを測る。壁面は強く傾斜して直線的に立ち上がり、底面に近い10cm前後は直立に近い形状を取る。埋土は褐色～暗褐色シルトを主体とし、壁面の崩落を伴うが、基本的には水平堆積の様相を示す。調査区壁面で記録した土層断面では、掘り直しの痕跡は認められなかった。

出土遺物（第14図）

埋土から弥生土器片が出土しているが、上層と中・下層で遺物の出土量や内容に大きな差異は見られなかった。13は小型甕の口縁部で、端部が外側に反り返って延びるタイプのもの。外面下部はタテハケ、上部と内面はナデ調整を施し、頸部に断面三角形の低い突帯を巡らす。15は平底の鉢である。外面はタタキ調整ののち丁寧なナデ消しを、内面はハケ調整を行っている。16は壺の底部で、外面中位はタタキ、底部はヘラケズリ、内面は不定方向のハケ調整で仕上げている。14は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、外面に籐蓮弁紋を施すもの。なお、今回調査区は乙隠城跡に近く、この青磁碗が出土したことから1号溝状遺構は中世のものと想定していた。しかし出土遺物の整理作業時に確認したところ、表採資料を含め、中世の遺物はこの青磁片以外皆無であったことから、青磁碗は混入遺物で、溝状遺構は弥生時代の所産であると判断した。

【SD01 北東壁面】

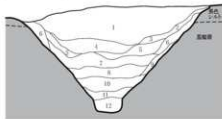
25.700m



0 2m

【SD01 北西壁面】

25.700m



【SD01 北西壁面】

- 1 埋褐色シルト
(黒褐色シルトブロック少量含む)
- 2 埋褐色シルト
- 3 埋褐色シルト
- 4 埋灰色シルト
- 5 埋褐色シルト
- 6 埋褐色シルト
- 7 埋灰色シルト
- 8 埋褐色シルト
- 9 埋褐色シルト
- 10 埋褐色シルト
- 11 埋褐色シルト
- 12 埋褐色粘質土
- 13 埋褐色粘質土
- 14 埋褐色粘質土

【SD01 北東壁面】

- 1 埋褐色シルト
- 2 埋褐色シルト (黄褐色粘質土含む)
- 3 埋褐色シルト
- 4 埋褐色シルト (埋褐色ブロック少量含む)
- 5 埋褐色シルト (黄褐色ブロック少量含む)
- 6 埋褐色土
- 7 埋灰色土 (黄褐色ブロック少量含む)
- 8 埋褐色粘質土 (黄褐色粘質土少量含む)
- 9 埋褐色シルト
- 10 埋褐色粘質土
- 11 埋褐色土 (黄褐色粘質土少量含む)
- 12 埋褐色粘質土 (黄褐色粘質土少量含む)
- 13 埋褐色粘質土
- 14 埋褐色粘質土

第16図 1号溝状遺構 土層断面図 (S=1/40)

その他の遺構と遺物（第7図）

本遺跡では、重機で掘削した表土内を含め、多数の遺物が出土しており、それらはほぼ弥生時代後期の資料に限定される。3は試掘トレンチで出土した平底の鉢。底部中央には焼成後に穿孔を施している。器壁は摩滅が激しいが、口縁部はナデ、体部の内外面は工具ナデで仕上げている状況が見て取れる。

【小結】

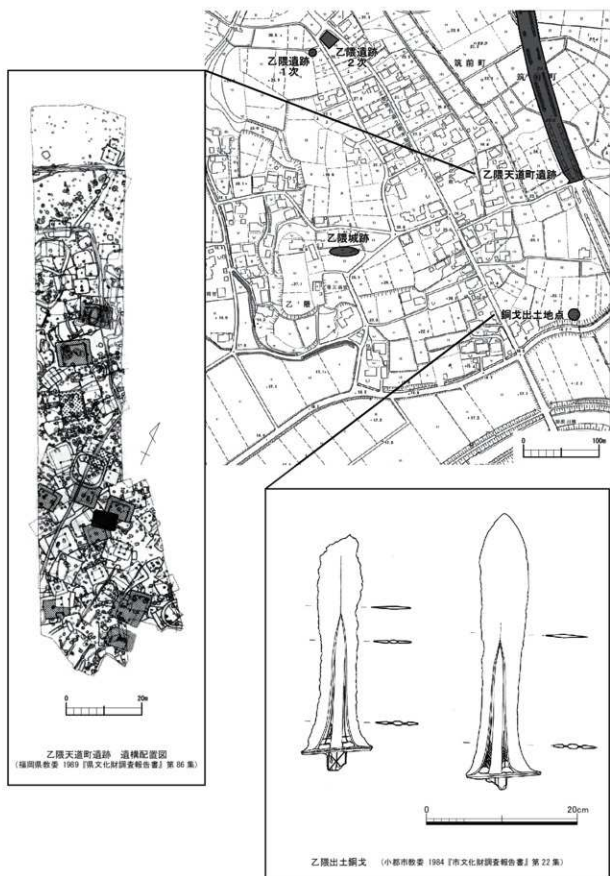
現在の乙隈の集落は、標高22～27m前後の台地上に展開しており、周辺の田畑から見ると鳥状の高まりとなっている。これが市町境を超えて筑前町四三嶋周辺まで延びており、古くはここで同一の生活圏が営まれていたと考えられる。

これまで乙隈区で確認されている埋蔵文化財は、第17図に示したとおりである。なお、乙隈天道町遺跡の範囲は、福岡県教育委員会刊行の『福岡県埋蔵文化財調査報告書 第86集 乙隈天道町遺跡』に掲載されている、遺跡所在地から復原を行っている。また、銅戈出土地点については、福岡県教育委員会が昭和54（1979）年に刊行した『福岡県遺跡等分布地図（久留米市・小郡市・三井藩編）』の掲載位置を、小郡市の都市計画図に転載している。

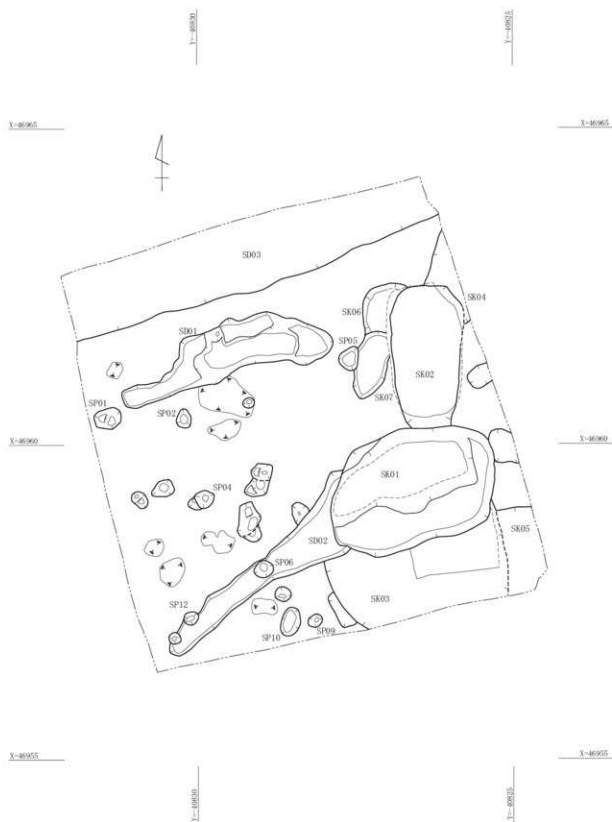
乙隈天道町遺跡は、昭和62（1987）年に県道整備に先立つ発掘調査が行われ、弥生時代中期から古代にかけての集落遺跡が検出されている。集落の主体となるのは弥生時代後期だが、中期の竪穴住居や祭祀土坑も一定のまとまりをもって確認されていることから、継続的に集落が経営されていたと考えられる。竪穴住居は、弥生時代を通じて近接した位置に繰り返し建て直しが行われており、その密集した状況は小坂井屋敷遺跡や三沢南崎遺跡など、小郡市内の弥生時代後期の集落と類似している。特に後期の竪穴住居は多量の遺物を伴う例が多く、この点も前述の2遺跡と共通している。また、平成8（1996）年には、西側隣接地で民間店舗の浄化槽設置に先立つ発掘調査を小郡市教育委員会が実施しているが、ここでも弥生時代中～後期の遺構・遺物が出土されており、集落域が小郡市側まで延長することが確認された。但し、この集落域は古墳時代前期で一旦断絶し、その後奈良時代に再び干潟遺跡群のような大規模な集落が成立する。

乙隈出土銅戈は、本項冒頭で記述したとおり、昭和36（1961）年に個人所有の畑で発見された。出土遺構は不明であるが、銅戈の形状は中広形で、弥生時代中期末から後期前半にかけての所産である。通常弥生時代の祭祀形青銅器は、筑紫野市隈・西小田遺跡や、筑前町ヒエダ遺跡、小郡市寺福童遺跡のような埋納遺構か、副葬品として甕棺墓から出土する。この銅戈の出土状況は不明であるが、乙隈天道町遺跡の集落に伴う墓域はまだ確認されておらず、銅戈出土地点周辺の今後の調査が待たれる。

今回報告した乙隈遺跡1・2では、弥生時代後期の遺構・遺物を出土しており、その内容から集落域の一部と想定される。これは乙隈天道町遺跡の最盛期とほぼ同時期であり、両者は同一の集落もしくは近接して併存する集落であったのだろう。弥生時代中期の遺物は表探資料を含めてほとんど見当たらず、後期になってから生活圏に組み込まれた範囲のようである。しかし今回調査区には、竪穴住居は存在せず遺構の密度も低いことから、集落域の端部であったと考えられる。また、5号土坑出土土器をはじめとする後期の遺物の中には、大型の製品もしくは器壁の非常に厚い資料はなく、甕棺を想定させるものは確認できなかったため、周辺に墓域が存在する可能性も低い。乙隈遺跡の所在する台地上で展開した弥生時代集落の全容と、これに付随する墓域の所在地については、今後の調査事例の増加に期待される。



第17図 乙隈遺跡周辺の遺跡



第18図 前沢遺跡 遺構配置図 (S=1/60)

(3) 前沢遺跡

【調査の概要】

前沢遺跡は、福岡県教育委員会の遺跡分布地図（昭和51年刊行）作成に先立つ調査で、弥生時代住居の露呈と遺物の散布が確認され、周知の埋蔵文化財包蔵地に認定された遺跡である。しかし本格的な発掘調査はいっさい行われておらず、詳細は長らく不明なままであった。近隣では、東に小規模な谷を隔てて三沢古賀遺跡、三国保育所遺跡が所在しており、弥生時代の集落跡が確認されている。

今回の調査対象地は、かつて遺構と遺物が確認された地点から南に70mほどの位置にある。小郡市域北部の三国丘陵から派生した、北西から南東に延びる低台地上にあり、東の谷部に向かう落ち際に相当する。遺構検出面は暗褐色ローム層で、標高は21.5m前後を測る。現在の宅地造成にあたって1.5m程のかさ上げがなされている。狭い敷地内での発掘調査で掘削土の仮置き場が十分に確保できなかったことと、後世の造成土が腐土や真砂土といった脆弱な土層であったことから、安全管理のため一部遺構は半截もしくは未掘削の状態でも調査を終了している。

【遺構と遺物】

1号土坑（第19図、図版7）

調査区南東隅に位置し、2・3号土坑および2号溝状遺構を切る。主軸は東西方向で、平面プランは楕円形を呈する。長さ2.8m、幅1.8m、深さ最大0.55mを測り、南から東にかけて幅0.5m前後のテラスを持つ。埋土は褐色土と黒褐色土の互層で全体的にしまりが悪い。

出土遺物（第22図）

1は土師器の小皿片。体部は回転ナデ、底部に回転系切りの痕跡が残る。このほか、同安窯系青磁碗の細片が出土している。

2号土坑（第19図、図版7）

調査区北東に位置する。4・6・7号土坑を切り、1号土坑に切られる。主軸はやや東に振った南北方向を取る。平面プランは楕円形を呈し、残存長2.1m、幅1.15m、深さ1.4mを測る。壁面は部分的に内傾しつつ、ほぼ直立している。埋土は均質な黒色シルトを主体とする。遺構の形状および埋土の状況から、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物（第22・23図、図版8）

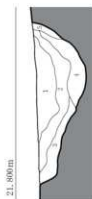
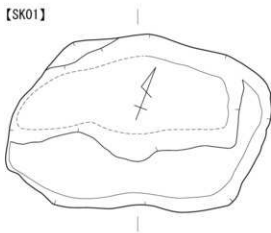
第22図の2は甕の上部で、肩部に1条の沈線がめぐり、口縁部の内外面に煤の付着が認められる。3～5は甕の底部。体部との接合箇所指オサエに由来するくびれを持つ。4の底部外面には木葉痕のような跡があるが、のちのナデ調整で不明瞭となっている。5の底部外面にはわずかに煤の付着が見られる。6・7は甕の上部。口縁部を外側に折り返し、端部に刻みを持つもの。6は外面に薄く煤が付着し、口縁部の一部に被熱による赤変が見られる。7は外面全体に煤が、内面には焦げ付きの痕跡がある。8・9は壺の底部。内外面に丁寧なミガキ調整が見られる。9は外面に黒斑が残る。いずれも弥生時代前期中葉の所産である。

第23図の1～4は安山岩の投弾。いずれもほぼ同じ大きさである。5は安山岩のスクレイパー。刃部の作りが粗い。6は緑色片岩の紡錘車未成品。表裏は丁寧に、側面はやや雑に磨いてあるが、穿孔の途中である。

3号土坑（第20図、図版7）

調査区南東隅に位置し、1・5号土坑を切り、2号溝状遺構に切られる。調査時は1号土坑のような土坑と考えて掘削を進めていたが、当初想定していたより深いものであったため、途中でトレンチ調査に切り替えている。また西半部は、調査期間と掘削中の安全を考慮して、未掘削のまま残すこととした。主軸は南北方向で、南端は調査区外へ延長する。平面プランは円形を呈する。検出長2.7m、幅2.85m、深さ1.75mを測る。壁面はやや内傾して立ち上がる。埋土は暗褐色土と灰黄褐色土の互層

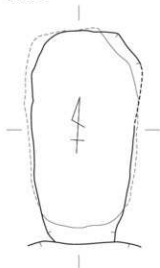
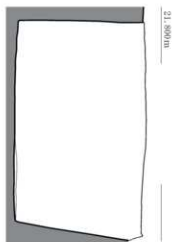
【SK01】



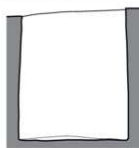
【SK01】

- 1 褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土 (褐色土和少量灰砂)
 - 4 暗褐色土 (褐色土和少量灰砂)
 - 5 褐色土+黄褐色土
- *全体に土層が厚い。

【SK02】

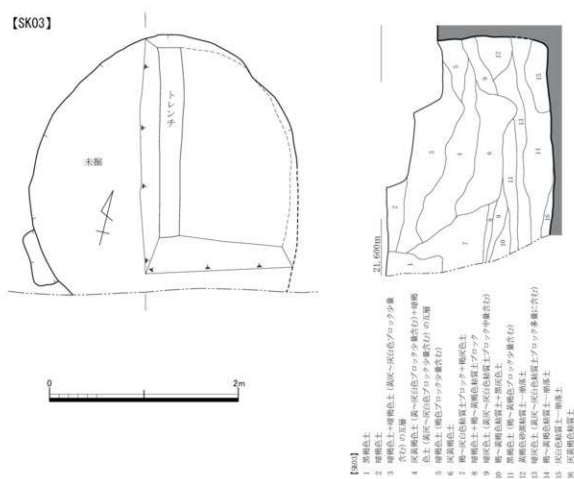


21,800mm



第19図 1・2号土坑 平・断面図 (S=1/40)

【SK03】



第20図 3号土坑 平・断面図 (S=1/40)

で、部分的に上部の崩落土が混じる。

出土遺物 (第23図、図版8)

安山岩の投弾が1点のほか、丹塗甕の底部細片が出土しているが、遺構の時期を特定する資料ではない。

4号土坑 (第18図、図版7)

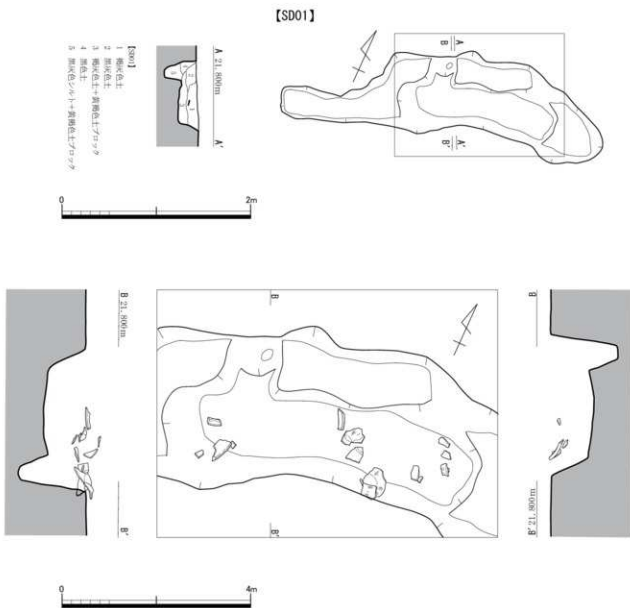
調査区北東隅で検出している。2号土坑に切られ、遺構の大半は調査区外に所在する。2号土坑とはほぼ同じ形状を取ると想定される。遺構の接する調査区東壁面が崩落する危険性があったため、平面プランの確認にとどめた。2号土坑と切り合う部分で確認した深さは0.9mで、壁面はやや内傾して立ち上がる。埋土は均質な黒色シルトを主体とする。

遺構の形状および埋土の状況から、貯蔵穴と考えられる。

5号土坑 (第18図、図版7)

調査区南東隅で検出しており、3号土坑に切られる。2号土坑と同様の形状を取ると思われるが、遺構の大半が調査区外に所在するため不明である。遺構の接する調査区東・南壁面に崩落の危険性があったことから、平面プランの確認にとどめた。3号土坑と切り合う部分で確認した深さは0.4mで、壁面はほぼ直立する。埋土は均質な黒色シルトを主体とする。

遺構の形状および埋土の状況から、貯蔵穴と考えられる。検出時に弥生土器の細片を採集している。



第21図 1号溝状遺構 平・断面図 (S=1/40)・遺物出土状況 (S=1/20)

6号土坑 (第18図、図版7)

調査区北東に位置する。2・7号土坑に切れ、残存状況は非常に悪い。南北残存長0.8m、東西残存幅0.7m、深さ0.15mを測る。

遺物の出土は皆無であった。

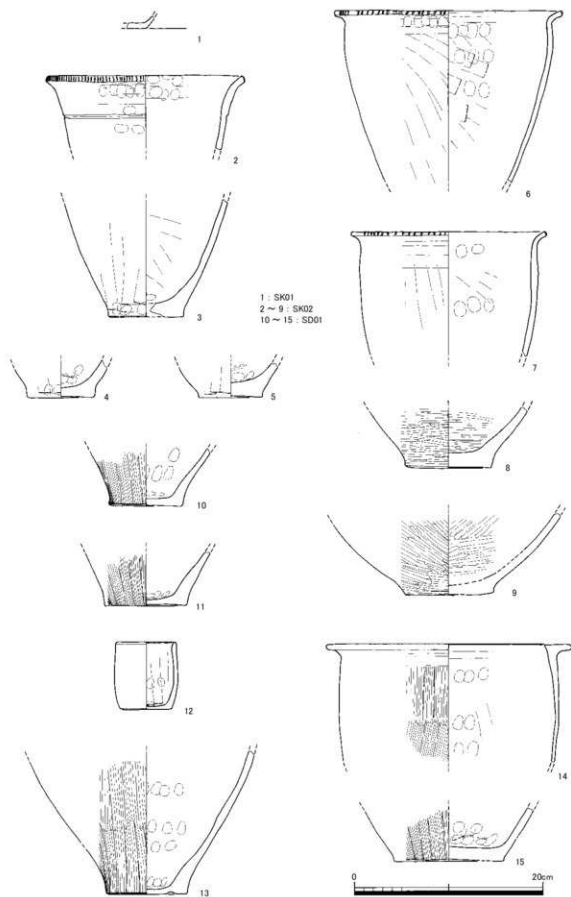
7号土坑 (第18図、図版7)

調査区北東に位置し、2・6号土坑を切ってピットに切られる。非常に小型の土坑である。主軸は北東一南西方向で、長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

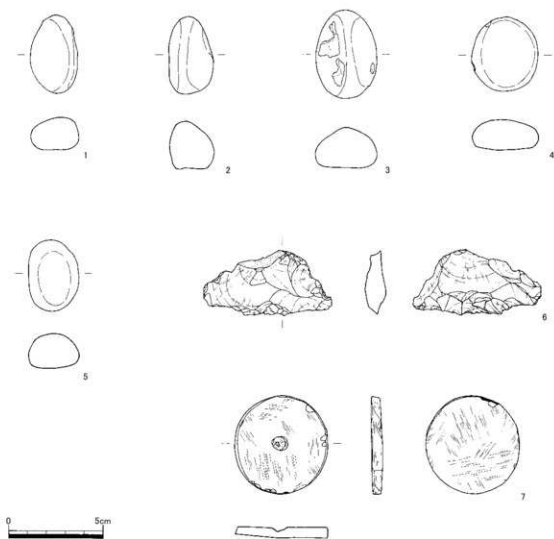
微量の土器片が出土したが、時期を判断することはできなかった。

1号溝状遺構 (第21図、図版8)

調査区北側に位置する。北に湾曲して東西方向に流れ、両端は調査区内で断絶する。上部が大幅に削平を受けていると考えられる。残存長3.45m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は褐色土と黒灰色土の互層で、東半部を中心にまとまった量の遺物が出土した。



第22図 出土遺物(1)(S=1/4)



第23図 出土遺物(2) (S-1/2)

出土遺物 (第22図、図版8)

10・11・13は甕の底部。外面にタテハケ調整が明瞭に残る。10は内面に焦げ付きの痕跡、11は底部外面に種子圧痕と思われる痕跡が見られる。13の底部裏面は接合に由来する円形のくぼみが見られ、内面に焦げ付きの痕が残る。12は小型のコップ状土器。部分的に摩滅しているが、内外面に丹塗痕跡が認められる。14は樽形甕の上部で15と同一個体である。口縁端部が水平に伸びるもの。15は底部で、外面にスサ圧痕が残る。内面には指オサエ痕跡が目立つ。

2号溝状遺構 (第18図、図版8)

調査区南側に位置する。1号土坑に切られ、3号土坑を切る。北東—南西方向に流れ、両端は調査区内で断絶する。残存状況は非常に悪く、上部は大幅に削平されている。最大残存長4.0m、最大幅1.85m、深さは5cm程度である。

埋土から土師器の小皿片が出土しているが、細片のため図示は控えた。

3号溝状遺構（第18図、図版7）

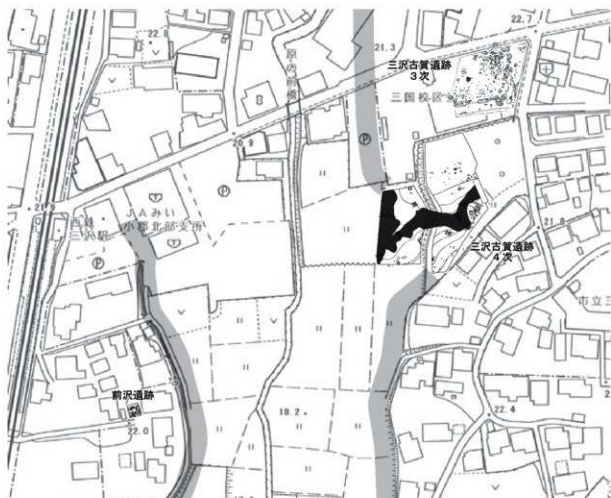
調査区北端で南岸の掘り込みラインのみを検出している。東西方向に流れる溝状遺構だが、調査区北壁面に崩落の危険性があったことから、平面プランの確認にとどめた。調査区内での検出幅は0.5m、埋土は暗褐色土を主体とする。

弥生土器の小片が出土しているが、遺構の時期を特定する資料ではない。

【小結】

前沢遺跡は、三国丘陵から派生した南北方向に延びる低台地上、開析谷へ地形が傾斜する東端に所在している。遺跡の東側には谷地形を隔てて同様の低台地があり、台地上には力武内畑遺跡や三国保育所遺跡、三沢古賀遺跡といった弥生時代の集落群が所在している。これらの遺跡は台地の頂部を中心に発掘調査が実施されており、弥生時代前期の早い段階から水田耕作を伴う集落経営が行われていたことが明らかとなっている。

今回の調査区で検出した弥生時代の遺構は、前期の貯蔵穴3基と中期の溝状遺構1条である。これとはほぼ同時期の遺構が、北東に隣接する三沢古賀遺跡、東に隣接する三国保育所遺跡でそれぞれ確認されている。このように、同時期の集落が谷部を隔てて並立する状況は、弥生時代の三国丘陵上でごく一般的に見られる。但し、前沢遺跡だけでなく、三国保育所遺跡や三沢古賀遺跡の弥生集落についても未だ不明瞭な点が多い。双方の集落全体の規模やその勢力関係、墓域の所在地など、今後の発掘調査の積み重ねによる解明が期待される。



第24図 前沢遺跡と周辺の遺跡 (S=1/2000)

遺物観察表

【乙隈遺跡 1】

法量=口:口径、高:器高、底:底径、径:直径
器種=弥生土器、土土陶器、青:青銅

押戻番号	図取番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元量)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
新446	巻頭 2	S K03	赤・赤	残存高:55.1 胴:35.4	赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	体・外:ハケ後ナデ 体・内:ハケ後ナデ	ほぼ定形	口縁部打ち直し 器底に修理	1

【乙隈遺跡 2】

押戻番号	図取番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元量)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
新704		S K03	赤・赤	残存高:5.35 底:7.2	外:に濃い褐色～ に濃い黄褐色 内:に濃い黄褐色	0.1～4.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含む	良好	体・外:板状工具ナデ後ナデ 体・内:ハケメ 底・外:ハケメ 底・内:ナデ	底部1/2	底部外面に 黒染	1
新704	6	S K04	赤・赤手	残存高:28 残存長:41 残存厚:1.85	浅黄褐色～に 濃い黄褐色	0.1～3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含む	良好	手ねね後ナデ	ほぼ定形		1
新704		鉄板 トレンチ	赤・鉄	口:(236) 高:(141) 底:9.1	に濃い黄褐色	2mm以下の白色砂 粒・雲母を中量多 く、角閃石をごく 微量を含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:上半は工具ナデ、 下半はナデメハケ 体・内:上半は鉋の工 具ナデ、中腹は不定形工 具ナデ、下半はタテハ 底:工具ナデ	口~体1/6以下 底1/4	底部に焼成 後の穿孔	2
新904		S K05 西平部	赤・赤	口:(245) 残存高:17.25	外:に濃い褐色～ 灰黄褐色 内:褐色～に 濃い褐色	0.1～3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量 含む	良好	口:ノコナデ 口:外:タテハケ 口:内:ヨコハケ 体・内:タテハケ 体・内:タテハケ後ナ メハケ	口1/3~体:上1/4	口縁部外面 ~体部外面 にスス	2
新904		S K05 西平部	赤・赤	残存高:15.35 底:(10.4)	外:灰白色～浅黄 色 内:に濃い黄褐色 ～浅黄褐色	0.1～2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量 含む	良好	体・外:タテハケ 体・内:板状工具タテ ナデ後タテハケ 底・外:不定ハケ 底・内:ナデ	体:1/2 底:定形	体部外面に 黒染	6
新904		S K05 ベルト	赤・赤	残存高:7.25	に濃い黄褐色	0.1～3.0mm以下の 白色砂粒・雲母を多 量を含む	良好	体・外:工具ナデ?器表 磨成のため不明 体・内:タテハケ 口:外:不定ハケ、器表 磨成のため不明 底:内:器表磨成のため 調整不明	底1/2		2
新904	5	S K05 西平部	赤・赤	口:242 高:35.8 体:底:25.9 底:(8.65)	外:褐色～に 濃い黄褐色 内:に濃い黄～ 褐色	0.1～3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量 含む	良好	口:ノコナデ 口:外:タテハケ後ナ メハケ 口:内:ヨコハケ 体・外:上半はタテハ ケ後ナデ、下半はタ テハケ 底・外:不定ハケ 底・内:ナデ	体部下部2/3欠損		1
新904	5	S K05 西平部	赤・赤	口:(215) 高:15.65 底:(8.2)	外:浅黄褐色～灰 白色 内:に濃い黄褐色	0.1～2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:ノコナデ 口:外:タテハケ 口:内:ヨコハケ 体・外:タテハケ、下半は 器表磨成のため不明 底:不定ハケ	口3/4~底1/4		11
新904	5	S K05 西平部	赤・鉄	口:201 高:8.15 底:(6.45)	外:に濃い黄褐色 ～浅黄褐色	0.1～2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:ノコナデ 口:外:ヨコナデ 口:内:ナメハケ 体:ナメハケ、外面は 器表磨成のため不明 底:外:器表磨成のため 調整不明 底:内:ナデ	底部を2/3欠損		9
新904		S K05 西平部	赤・鉄	口:(221) 残存高:7.8	内:に濃い黄褐色 ～浅黄褐色 外:黄灰色 内:灰白色～黄灰 色	0.1～2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:ノコナデ 口:内:ヨコハケ 体:ナメハケ、内面は 一部工具ナデ	口~体:上1/4	口縁部外面 にスス 口縁部 の工具を用いた 焼成、文様 の可能性あり 黒染	12

押戻 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号
新0048	5	S K05 西平部	赤・鉢	口:420 高:156 底:75	外:にぶい褐色～ 成黄褐色 内:にぶい褐色	0.1～3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:瀬ヨコナテ 口・外:ナナメハ後ヨ コナテ 口・内:ヨコハテ 体:タテハ後ナナメハ テ 底:外:不定ハテ 底:内:ナテ	口:1/2.5 底:宛形	底部中央に 穿孔 体部下面下 手に黒染	10
新0049	5	S K05 ベルト	赤・鉢	口:224 高:169 底:81	口:にぶい赤褐色 外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.1～3.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:瀬ヨコナテ 口・外:タテハテ 口・内:ヨコハテ 体:外:タテハテ 体:内:タテハテ、上笠は その後ヨコナテ 底:外:不定ハテ 底:内:タテハテ	口:体:上2/5 穴眼		3
新0050		S K05 西平部	赤・甕	残存高:91 底:106	外:にぶい黄褐色 ～にぶい褐色 内:淡灰色～にぶ い褐色	0.1～2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	体:ナナメハテ 底:不定ハテ	体:1/1.5 底:ほぼ宛形		7
新0052	5	S K05 西平部	赤・甕	残存高:2215 体:最:105 底:9.2	外:灰黄色～淡黄 色 内:褐色	0.1～3.0mm以下の 白色砂粒・雲母を多 量に含む	良好	体・外:上半は器表磨成 のため観察不明。下半は タテハテ、器表磨成のた め不鮮明 内:中笠はタテハテ、 地はヨコハテ。器表磨成 のため不鮮明 底:不定ハテ、器表磨成 のため不鮮明	底:1/4 底:宛形	体部下面下 笠・器部外 面に黒染	8
新0053	5	S K05 西平部	赤・甕形	上部部径: 130 高:180 底部径:148	にぶい褐色	0.1～2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	上瀬部:ナテ 体・外:上半はハテメ後 ナテ削し、下半はタテキ 後ナテハテ 体:内:上半はしぼり 後ナテ、下半はタテキ後 ナテ 下部部:工具ナテ	ほぼ宛形		13
新0054		S K05 ベルト	赤・甕形	上部部径:119 残存高:98	外:褐色～にぶい 黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.1～4.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	上瀬部:ヨコナテ 外:タテハテ 内:上笠はヨコナテ、中 笠はナテ	上半:1/2	内面上瀬部 付近に黒染	4
新0055	5	S K05 西平部	赤・無蓋甕	口:473 高:145 体:最:181 底:104	外:淡黄褐色 内:淡黄褐色～に ぶい黄褐色	0.1～5.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:瀬ヨコナテ 体・外:上半はナナメハ テ、下半はヨコハテ 体:内:上半はタテハテ、 下半はヨコハテ 底:外:不定ハテ 底:内:ナテ	口:1/2 体:3/4 底:宛形	体部下面下 半・体部内 面中笠～下 笠に黒染	5
新0056	5	S K05 西平部	赤・複合 口縁甕	口:366 高:514 体:最:105 底:86	外:淡黄褐色～明 赤褐色 内:淡黄褐色～黄 褐色	0.1～2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:瀬～口・外:ヨコハテ 口・内:タテハテ 器:外:タテハテ後ナメ テハテ 器:内:タテハテ後ヨコ ハテ 体・外:タテハテ 体:内:ヨコハテ 底:ヨコナテ 底:外:ナテ	ほぼ宛形	体部外面黄 帯に斜目を 施す 体部外面中 先付近に黒 染	4
新1196.1		S K05 東平部	赤・甕	残存高:46 底:76	外:淡黄褐色～に ぶい黄褐色 内:灰黄色～黄灰 色	0.1～2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	体・外:瓶状工具ナテ テ後タテハテ 体:内:ナナメハテ 底:外:不定ハテ 底:内:ナテ	底部宛形	体部外面に 黒染	8
新1196.2		S K05 東平部	赤・複合 口縁甕	口:(142) 残存高:725	外:淡黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.1～2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:外:瓶状工具ナテ 口:瀬～口・内:ヨコナテ 体:外:タテハテ 体:内:ヨコハテ	口:瀬3/4	口縁部一 部器部面に 黒染	6
新1196.3	6	S K05 東平部	赤・複合 口縁甕	口:(256) 残存高:275 体:最:120	外:にぶい黄褐色 内:にぶい褐色	0.1～2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:瀬～口・内:ヨコナテ 口・外:ナナハテ 器:ナナメハテ 体・外:タテハテ 体:内:ナナメハテ、大部 分は器表磨成のため調 整不明 底:ヨコナテ	口:ほぼ宛形 底:上1/1.5	体部外面の 尖等に斜目 を施す 口縁部外面 に黒染	5
新1196.4	5	S K05 東平部	赤・複合 高脚甕	口:1815 高:396 体:最:295 底:79	外:淡黄褐色～に ぶい褐色 内:黄灰色～淡黄 褐色	0.1～3.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:瀬～口・内:ヨコナテ 口・外:ヨコハテ 体:外:ナナメハテ 体:内:底～内:ナナメ ハテ(複数の工具使用) 底:ナテ	ほぼ宛形	外面に黒染 5個	3
新1196.5	5	S K05 ベルト	赤×ニ チュエ鉢	口:575 高:415 底:25	にぶい黄褐色～ 褐色	0.1～4.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	手捏成 口縁部はヨコナテ、地は 胎ナテ指ナテ	ほぼ宛形		5

押戻番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
新1186.6	5	S K05 東半部	赤・複合 口縁段	口:φ5.3 高:35.5 体・底:φ8.9 底:φ6.7	外:浅黄褐色~に 深い褐色 内:浅黄褐色	0.1~2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:瀝・器表摩滅のため 調整不明 口:外:ヨコハタ後ヨコ ナデ 口:内:ヘラミダキ 胴:外:タテハタ後ナメ メハケ 胴:内:タテハタ 体:タテハタ 変:ヨコナデ 底:器表摩滅のため調整 不明	口:1/5 胴:1/4 体:1/3 底:ほぼ定形	体部外面の 変形に注目 を多す	4
新1186.7	5	S K05 ベルト	赤・複合 口縁段	口:φ4.9 残存高:35.3 体・底:28.75	に深い褐色	0.1~3.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:ヨコナデ 胴:外:タテハタ 胴:内:ヨコハタ・ナメ ハハケ 体:外:ナメメハケ後ナ メハケ 体:内:タテハタ 変:ヨコナデ	口:1/3欠損 底:欠損	体部外面上 段~中段、 体部中段~ 下段に黒塗	1
新1200.1		S K05 東半部	赤・変	口:φ20.5 残存高:7.8	外:褐色~に深い 内:に深い褐色~ に深い黄褐色	0.1~1.0mmの白色 砂粒・雲母を少量含 む	良好	口:瀝・ヨコナデ口:外: タテハタ 口:内:ヨコナテ後一部 ヨコハタ 体:外:タテハタ 体:内:ナメメハケ	口:1/6	口縁部に黒 塗?	2
新1200.2		S K05 東半部	赤・変	残存高:8.75 底:10.15	外:浅黄褐色~に 深い黄褐色 内:褐色~に深い 黄褐色	0.1~2.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	外:板状工具ナデナデ 外:器表摩滅滅のため 不明 底:内:不定ハタ 底:内:ナデ	底部定形	体部外面~ 外部外面端 部に黒塗	9
新1200.3	6	S K05 東半部	赤・変	口:φ7.4 残存高:35.3	外:に深い黄褐色 ~明赤褐色 内:に深い黄褐色	0.1~3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:外:タテハタ 口:内:ヨコナデ 体:外:ナメメハケ・タ テハタ後板状工具ナデ 体:内:板状工具ナデ、削 裏調整のため不明 変:ヨコナデ	口:3/4~体:1/4	体部外面中 段付近に黒 塗	1
新1200.4		S K05 東半部	赤・高杯	口:φ8.7 残存高:6.9	外:浅黄褐色~淡 黄褐色 内:に深い黄褐色	0.1~3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:瀝~口:外:ヨコナデ 口:内:ヨコハタミダキ 体:外:タテハタ 体:内:タテハタミダキ	口:体:1/8	口縁部外面 に黒塗	11
新1200.5	5	S K05 東半部	赤・高杯	口:φ11.8 高:22.95 胴:幅:19.35	外:外~脚:に深い 黄褐色~浅黄 褐色 杯:内:に深い黄 褐色	0.1~3.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	口:外:外~内:ヨコハ タミダキ 杯:外:タテハタミダキ 脚:外:タテハタ後ナ メハタミダキ 脚:内:ヨコハタズリ 断面はヨコハタ	杯:ほぼ定形 脚:断面の大部分 を欠損	口縁端部~ 外部外面に 黒塗	10
新1486.1		S K06	赤・変	残存高:2.8 底:8.75	外:に深い黄褐色 ~に深い赤褐色 内:浅黄褐色	0.1~5.0mmの白色 砂粒・雲母を中量含 む	良好	体:外:工具ナデ後ナデ か 体:内~底:内:器表摩滅 のため調整不明 底:外:ナデ	底部定形	底部外面に 黒塗 外:面にまば らにスス 残存	1
新1486.2		S K07	赤・変	残存高:4.75	外:に深い褐色 内:褐色~に深い 褐色	0.1~2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	口:瀝・ヨコナデ 口:ヨコハタ 体:内:ヨコナテ後ヨコ ハタ 変:ヨコナテ	口:1/6以下	口縁部外面 にスス	1
新1486.3	6	S K07	赤・支脚	上端部径:7.4 高:11.0 裾部径:10.7	外:褐色~灰黄褐 色 内:灰黄色~浅黄 褐色	0.1~2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	上端部:不定ナデ 体:外:タテキ 体:内:上段はほぼ直 後タテナデ、下段はヨコ ナテ 下端部:ヨコナテ	口:1/2欠損		6
新1486.4		S K08	赤・変	残存高:9.75	外:浅黄褐色~灰白 色 内:灰黄色~淡黄 褐色	0.1~3.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	体:外:タテハタ 体:内:ヨコハタ 底:外:器表摩滅のため 調整不明 底:内:不定ナデ	底:1/2	体部外面下 段にスス	2
新1486.5		S K08	赤・支脚	上端部径: 6.95 残存高:6.3	外:に深い黄褐色 ~淡赤褐色 内:に深い黄褐色	0.1~2.0mm以下の 白色砂粒・雲母を中 量含む	良好	上端部:ヨコナテ 外:工具ナテナテ後ナ メハタ 内:タテナテ	1/2	一部焼熱の ための変	8
新1486.6	6	S K08	赤・鉢	口:16.2 高:8.7 底:5.35	外:に深い褐色~ 内:褐色~に深い 褐色	0.1~3.0mm以下の 白色砂粒・雲母・赤 色顔料を中量含む	良好	口:瀝~口:外:ヨコナデ 体:外:上段はナメハ タ、断面は工具ヨコナテ後 不定ナデ 体:内:上段はヨコナ デ?器表摩滅のため不 明、ほぼヨコハタ・ナ メハタ 底:外:器表摩滅のため 調整不明 底:内:タテハタ・ヨコハタ	1/200	体部外面下 段~底部外 面に黒塗	4

押戻 番号	図取 番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元量)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号
第1404-7			S K08 赤・黄	残存高:1015	にぶい黄褐色	0.1~4.0mm以下の 白色砂粒・雲母・赤 色顔料を中量含む	良好	口・瘤 器表摩滅のため 調整不明 口・外:ヨコナデ 口・内:ヨコハケ・ナナメ ハケ 体・外:上半はタテハケ、 下半はヨコナデor工具 ヨコナデ 体・内:工具ヨコナデ後 不定ナデか	口:1/4以下 体:1/4		5
第1404-8			S K09 土・赤	残存高:52	外:にぶい黄褐色 内:褐色	3mm以下の白色砂 粒・雲母をやや多く 含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:手持ちヘラケズ リ 体・内:工具ナデ	口:1/6以下 体:1/6以下	外面に黒塗	4
第1404-9	6		S K09 土・赤	口:498 高:51	にぶい黄褐色	5mm以下の白色砂 粒・雲母をやや多く 含む	良好	口:ヨコナデ 体・外:手持ちヘラケズ リ 体・内:工具ナデ	ほぼ定形	内外に対応 する黒塗	3
第1404-10			S K09 土・小型 丸底皿	口:608 残存高:72	褐色	0.1~5.0mm以下の 白色砂粒・雲母・赤 色顔料を中量含む	良好	口:工具ヨコナデ 体・外:手持ちヘラケズ リ 体・内:皿部下方はヨコ ハケ、皿はヨコナデ	2/5		1
第1404-11	6		S K09 土・赤	口:163 高:75	にぶい黄褐色	0.1~3.0mm以下の 白色砂粒・雲母・赤 色顔料を中量含む	良好	口:器表摩滅のため調整 不明 体・外:上半はタテハラ ケズリ後ヨコハケ・ナ メハケ、下半は不定ヘラ ケズリ後ナメハケ 底・外:不定ハケ 底・内:工具ナデ	1/20	底部外面に ヘケ掻き	2
第1404-12	6		S K10 赤・黄	口:148 残存高:189	外:にぶい褐色~ 同褐色 内:にぶい褐色	3mm以下の白色砂 粒・雲母をやや多く 含む	良好	口・瘤 ナデ 口・外:タテハケ 口・内:ヨコハケ 体・外:上半はタテハケ、 下半はタテハケ後ヘラ ケズリ後タテキ 体・内:タテハケ、下笠は 工具ナデ	口:3/4 体:7/8 底:欠損	外面に黒 塗、底部 面にスス	1
第1404-13			S D01 赤・小型 碗	残存高:69	黄褐色	2mm以下の白色砂 粒・雲母をやや多く 含む	良好	口・瘤 ナデ 口・外:タテナデ 口・内:ヨコナデ 体・外:タテハケ 体・内:工具ナデ	口:1/8以下 体:1/8以下		1
第1404-14			S D01 青・碗	残存高:32	緑・オリーブ灰色 黒地・灰白色	0.1mmの白色砂粒・ 褐色顔料を少量含む	良好	口:ロクロ水引き	1/30以下	外面に黒塗 弁文	4
第1404-15			S D01 赤・赤	口:4149 高:114 底:418	にぶい黄褐色	3mm以下の白色砂 粒・雲母をやや多く 含む	良好	口・外:ナデ 口・内:タテハケ 体・外:タテキ後ナデ削 じ 体・内:タテハケ、上笠の ふその後部分的にナ メハケ 底:工具ナデ	1/2		3
第1404-16			S D01 赤・赤	残存高:1425	外:灰黄褐色へ にぶい褐色 内:にぶい褐色	5mm以下の白色砂 粒・雲母を多く含む	良好	体・外:タテキ 体・内:ヨコハケ・ナナメ ハケ 底:ヘラケズリ	体:底ほぼ定形		2

【前沢遺跡】

神岡 番号	図版 番号	出土遺構	法番cm ² × 枚(元積)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号	
第2294-1		S K01	土・小皿	残存高:13	にぶい褐色	1mm以下の白色砂粒・雲母をわずかに含む	良好	体・口縁コナテ 底・口縁高切り	1/30以下		1
第2294-2		S K02	赤・甕	口:φ210 残存高:125	にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	4mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む	良好	口:口コナテ 体:口コナテ、内部は器 差摩滅のための調整不明	口1/2		2
第2294-3		S K02	赤・甕	残存高:123 底:φ80	にぶい褐色～ 同黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母・角閃石を多く含む	良好	体・外:工具ナゲナテ 底:ナゲ	底1/2		4
第2294-4	8	S K02	赤・甕	残存高:39 底:71	外:褐色～ にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色 ～ にぶい黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む	良好	体・外:工具ナゲナテ 底:不明	底部定形		2
第2294-5		S K02	赤・鉢?	残存高:355 底:φ8	外:灰黄褐色～ にぶい褐色 内:地灰色	3mm以下の白色砂粒・雲母・角閃石を多く含む	良好	体・外:工具ナゲナテ 底:ナゲ	底部定形		3
第2294-6	8	S K02	赤・甕	口:φ411 残存高:1815	外:にぶい黄褐色 ～ にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む	良好	口:口コナテ 体・外:工具ヨコナテ 底:内:工具ヨコナテ	口2/5	体部内面に 灰、下壁に それぞれ黒 層	1
第2294-7	8	S K02	赤・甕	口:φ37 残存高:131	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色 ～ にぶい黄褐色	4mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む	良好	口:口コナテ 体:工具ヨコナテ	口～体1/3		1
第2294-8	8	S K02	赤・壺	残存高:64 底:92	外:にぶい褐色～ にぶい黄褐色 内:にぶい褐色	2mm以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む	良好	体:ハウミギキ 底:ハウミギキ	底部定形	外側に黒層	6
第2294-9	8	S K02	赤・壺	残存高:855 底:93	外:にぶい褐色～ にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	4mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む	良好	体:ハウミギキ 底:ナゲ	底部定形		5
第2294-10		S D01	赤・甕	残存高:61 底:77	外:浅黄褐色～ 褐色 内:灰白色～ 浅黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む	良好	体・外:テテハテ 底:内:ナゲ 底:ナゲ	底部定形		5
第2294-11		S D01	赤・甕	残存高:56 底:87	外:浅黄褐色～ にぶい黄褐色 内:浅黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む	良好	体・外:テテハテ 底:内:器差摩滅のための調整不明 底:ナゲ	底部定形		4
第2294-12	8	S D01	赤・フツブ 前土器	口:φ59 高:715 底:φ50	外:浅黄褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む	良好	口:一底・外:器差摩滅のための調整不明 体・内:工具ナゲ 底:内:ナゲ	2/5	外周丹塗り	11
第2294-13	8	S D01	赤・甕	残存高:151 底:56	外:にぶい黄褐色 ～ にぶい褐色 内:にぶい黄褐色 ～ にぶい黄褐色	2mm以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む	良好	体・外:テテハテ 底:内:器差摩滅のための調整不明 底:ナゲ	体1/4 底:定形	底部外面に 水中位塗	3
第2294-14	8	S D01	赤・樽形甕	口:φ86 残存高:1235	浅黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む	良好	口:口コナテ 体・内:テテハテ 底:内:工具ナゲナテ 底:ナゲ	口1/5		1
第2294-15	8	S D01	赤・樽形甕	残存高:565 底:116	浅黄褐色	3mm以下の白色砂粒・雲母をやや多く含む	良好	体・内:工具ナゲナテ 底:ナゲ	底部定形		1



①乙限道跡 1次遠景



②土器検出状況 (北から)



③土器検出状況 (東から)



①乙隈遺跡1 土器絵面部分詳細



②乙隈遺跡1 胴下部の調整痕もしくは線刻



①乙隈遺跡2 遺構検出面全景 (南から)



②乙隈遺跡2 検出面下層全景 (北から)



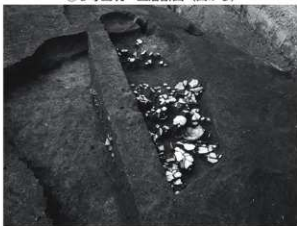
①4号土坑 完掘状況 (東から)



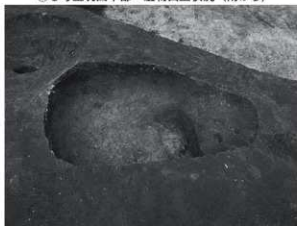
②5号土坑 土層断面 (西から)



③5号土坑西半部 遺物出土状況 (南から)



④5号土坑東半部 遺物出土状況 (南から)



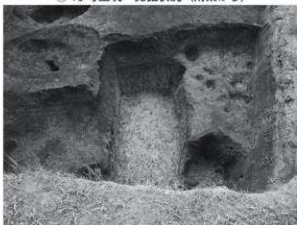
⑤8号土坑 完掘状況 (南西から)



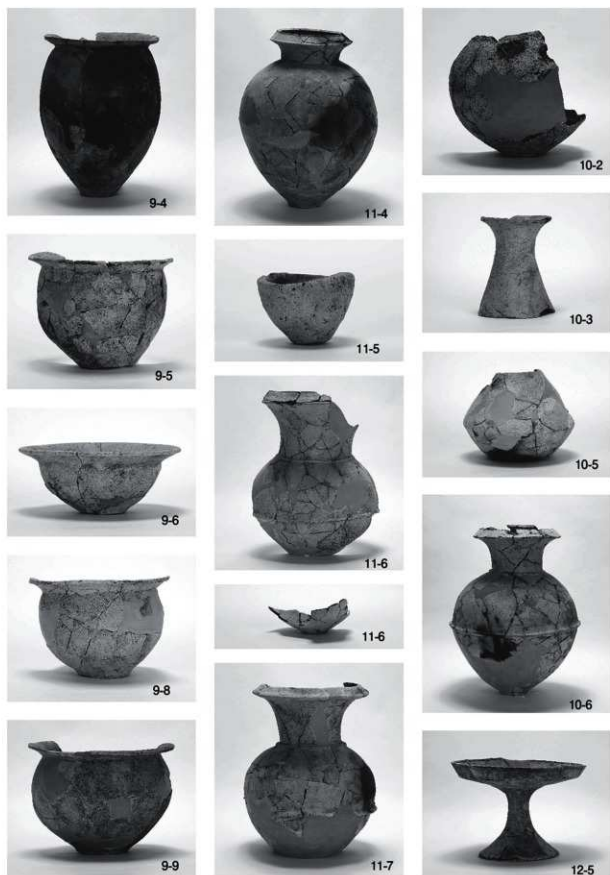
⑥10号土坑 完掘状況 (南東から)



⑦1号溝状遺構 完掘状況 (北西から)

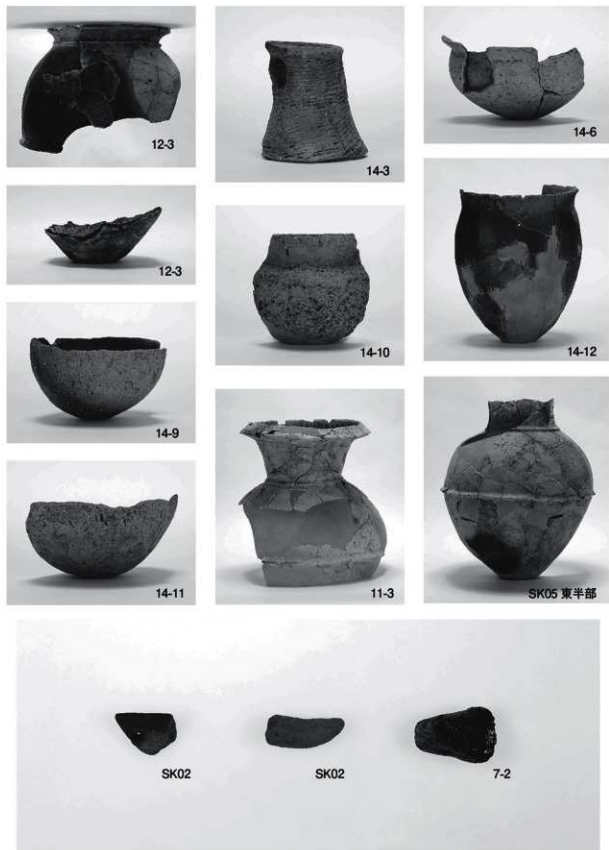


⑧7号土坑・12号土坑 完掘状況 (北から)



出土遺物 (1)

图版 6



出土遺物 (2)



① 前沢遺跡 全景 (東から)



② 1号土坑 土層断面 (東から)



③ 2号土坑 完掘状況 (北東から)



④ 3号土坑 土層断面 (東から)



⑤ 調査風景

図版 8



① 1号溝状遺構 土層断面 (西から)



② 1号溝状遺構 遺物出土状況 (南から)



③ 1号溝状遺構 完掘状況 (南東から)



④ 2号溝状遺構 完掘状況 (北東から)



22-4



22-6



22-9



22-12



22-7



22-14



22-13



22-8



22-15

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書8							
副書名	平成26年度 国庫補助事業 市内遺跡調査報告書							
巻次								
シリーズ名	小都市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第299集							
編著者名	上田 恵/山崎頼人							
編集機関	小都市教育委員会							
所在地	〒838-0198 福岡県小都市小郡255-1 Tel. 0942-72-2111							
発行年月日	2016(平成28)年3月31日							
保管場所	[写真・図面・遺物]小都市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838-0106 福岡県小都市三沢5147-3 Tel. 0942-75-7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
乙隈遺跡1	小郡市 乙隈	40216		33° 43′ 48″	130° 58′ 01″	20101220	1㎡	不時発見
乙隈遺跡2	小郡市 乙隈	40216		33° 43′ 51″	130° 58′ 03″	20140620 ～ 20140729	80㎡	個人住宅 建設
前沢遺跡	小郡市 三沢	40216		33° 42′ 26″	130° 56′ 09″	20140806 ～ 20140905	90㎡	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
乙隈遺跡1	集落	弥生	竪穴住居	弥生土器				
特記事項	弥生時代終末期の検出土器壺を伴う竪穴住居跡の一部を確認した。							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
乙隈遺跡2	集落	弥生	土坑・溝・ピット	弥生土器				
特記事項	東に近接する乙隈天沼町遺跡と同時期の弥生時代後期の集落跡を確認した。遺跡の所在地は台地の傾斜部であり、今回調査区より南および南側の台地頂部には確実に遺跡が延長すると考えられる。							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
前沢遺跡	集落	弥生 近世	貯蔵穴・溝 土坑	弥生土器 陶磁器				
特記事項	周知の埋蔵文化財包蔵地「前沢遺跡」として初めての本格的な発掘調査である。遺構密度は低いものの、北東に近接する三沢古賀遺跡、東に近接する三国保育所遺跡の弥生時代集落が、この位置まで延長することを確認した。							

埋藏文化財調査報告書 8

—平成26年度 国庫補助事業 市内遺跡調査報告書—
小郡市文化財調査報告書第299集

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1
印刷 片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園1丁目8-15